13

おかえり　Way Back

川鵜鶏肋
Lagado
春屋アロヅ
なぎ
Fukapon

mnfikmyhk
CREATURE
MIXING

Contents

家路 川鵜鶏肋 …… 02

異能力鳩娘 Lagado …… 36

大事なもの 春屋アロヅ …… 37

猫と二人で Fukapon …… 40

Re:debut なぎ …… 43

お家に帰るまでが …… 44

ただいま

家路

mnfikmyhk

CREATURE MIXING 13

家路

川鵜鶏肋

キメラ（シメール）、という言葉がある。

ギリシア神話に登場する、ライオンと山羊とあと何だったか忘れたが、複数の生物の部品が入り混じった怪物だ。

父親とも母親とも似つかぬ世界に一種一頭の獣である彼女は、一体自分のことを何者だと認識していたのだろうか。

自分が何者か分からない。確固たるルーツといえるものがない。名はダン・ルイ・マティアス・ロシニョール。

現時点の国籍はイタリアとアメリカの二重国籍という中途半端な状態だが、成人するまでにはどちらかに決定することになるだろうし、正直どちらでもいい。

父親の名も母親の名も祖父母の名も、曾祖父曾祖母の名前も出身地も分かっている。だが、どこの人種や民族の血がどう混ざってるのかは複雑すぎて簡単には説明できないし、これも正直言ってどうでもいい。本当に血が繋がっているかどうかも確信できないのだし。

問題は名前でも国籍でも遺伝子構成でもない。所属意識の欠如だ。どの国でもどの街でも彼は異質な存在だったし、彼にとっても自分のいるべき住み処という実感がなかった。

見た目の問題は意に介さないやつらも大勢いたし、彼らが親しみを抱いてくれていることもそれなりに理解できたし、有り難いことだとも思った。

だが。

告白しよう。

親兄弟も含め、周りの連中を同じ人間とは思えない。いや、自分を人間だと思えないと言った方が正確だ。

では何者か、と問われて明確な答えを返せるわけではないのだが。ともかく、理屈ではなく同種と思えないのだ。

主治医は種同一性障害と呼んでいたものだ。

念のため断っておくが、人間が嫌いなわけじゃない。むしろ人類を愛していると言ってもいい。

しかしその質は、賢い犬や誇り高い猫、美しい馬といった存在に対する愛情と同様だ。いや、これでは語弊があるか。人間を自分より過当な存在と見下しているつもりはない。遙かに高度な知性と文化を備えた宇宙人に例えてもいいぐらいだ。

だが違う。科学的にどうであれ道徳的にどうであれ、自分の感覚に従えば違うものは違うとしか言えないのだ。

そんなある年の春。いくつかのごたごたを経て。

主治医から転地療養を指示され、祖父の出身地というこの珠坂にやってくることになった。

ここで何をやれともやるなとも言われなかったのは、今思っても奇妙な話だが、当時は深くは考えなかった。

かつてはブラジルへと言われて伯父の元へ行き。その後カラテをやれと言われてカラテをやり。今度は日本へ行けと言われてここに来た。

ヒトの支配する世界において生きる意味もやるべき事もまるで見いだせないのに、わざわざ主体性を発揮するだけの理由がなかった。ただただ外部からの力に流された結果こうなっただけだ。

居室として駅前の立派なホテルのスイートルームを与えられ。ヒトの中に混ざり、ヒトのための食物を喰らい、なんとなくヒトの学校に通い、なんとなくヒト向きの授業を受け、なんとなくヒトっぽい生活をする。それはどこの国のどこの街でも同じで。

この国でもそれを十回ばかり繰り替えしたある日。いつものように退屈な（稚拙なと言ってもいい！）授業を受け終え、現在の住居であるホテルへと帰る途中で、

「！」

この世に生を受けて初めて、ダンは同類の姿を見かける事になる。

向かいの歩道、コンビニエンスストアの前にたたずむツーテールにセーラー服の少女に、なぜか目を惹かれた。

神妙な面持ちで誰かを待っている様子のその娘が急にこちらを振り返り、真っ向から見つめ返してくる。

「うっぷす！」

大きく黒目がちの瞳に宿る活発な意志の力に気圧され、反射的に目を逸らした一瞬の間に、少女は姿を消していた。

否。

なんたることか。

水平に近かったはずの視線が斜め下から突き刺さってくる。

ぺたり。

瞬きの間に、音もなく。懐にまで忍び寄られていた。

「素晴らしい。これこそ遺伝子の悪戯のなしうる奇跡かしら。ついに最高の素質の持ち主に巡り会えました」

かつて祖父に聞かされた解説を正しく理解できていたとすれば、この国の少女達の挙措は大和撫子とかいう流儀に則っているはずだ。

音もなく滑るような歩法はともかくとして、

初対面の男性の身体を撫で回すというのは、大和撫子的にはアリなのだろうか。

『おいおい、いきなり何をするんだよ』

一番馴染んだフランス語が口をついていた。日本語で言い直そうとしたところに、

「ダン・ロシニョールさまとお見受けいたします……わたくし、七瀬鈴菜（ななせすずな）と申します」

柔らかい笑顔とともに、お構いなしの日本語で返された。容姿から想像される通りの、よく澄んだ可愛らしい声だった。

「以後お見知りおきを。今日はご挨拶まで、ごきげんよう」

少女は深々と腰を折って頭を下げると、呆然とするダンを置き去りに歩き去ってしまった。

何だったのだろうか。わけが分からない。

ただ一つだけ言えることがある。あの少女は他の人間とは違う。両親ですら同種と思えなかった自分が、始めて同種の姿を見つけたのだ。

あらゆる動物の棲むエデンの園にありながら孤独であったアダムが神からイブをつかわされた時も、きっとこんな気持ちだったのだろう。

大げさに言っているつもりはない。自分は世界に独りぼっちではない、と知ったその日。ダンの家路の歩みはかつてなく軽かった。

同類に出会えた興奮のあまりすっかり失念していたが、詳しいことを聞きたいと思っても後の祭り。
あの少女は名前以外の手がかりを何一つとして置いていかなかったのだ。
ダンの通う浅葱谷中の同級生達に聞いたところによると、焦げ茶に白のセーラー服は紫城学園中等部のものらしい。しかし、ナナセの名を出した途端に皆一様に口をつぐんだ。誰も彼もが愛想笑いとともに急用を思い出し、そそくさと姿を消す。
それではと教師に尋ねてみたら、反応はより極端だった。
「知らん。俺は何も知らんぞ」
「あー聞こえない聞こえない」
「海外育ちのお前は知らなくて当然かも知れんが、悪いことは言わん。珠坂の旧家とは関わるな」
事情に詳しそうな教頭を問いに問い詰めてようやく返答らしい返答が得られたが、あまり役には立たなかった。
一体何者だ、ナナセ。

教頭の忠告には一応頷いてはおいたが、従う気など毛頭ない。帰り道もいつもより歩みを遅くして、特徴的な薄い色の猫っ毛のツーテールと焦げ茶のセーラー服の組み合わせを探していたが、それらしい姿はなかなか見つからず。
「あらダンさま、またお会いできて光栄ですわ」
「！」
いいかげん諦めて歩を早めたところで、後ろから声を掛けられた。
振り返った先には、ツーテールの少女が二人。
どちらも同じ顔で、なぜか二人とも右目に眼帯、白のアオザイなんぞを身につけていたりする。
双子？
「さて問題です」
「鈴菜はどちらでしょうか」
制服でないところをみると、わざわざこんなネタを仕込んでダンを待ち伏せていたのか。
「おいこら……」
何を考えているのかさっぱり分からない。
昨日の今日で向こうから接触してきたのであるから、ダンの努力はまるっきり無駄だった事になる。結果オーライとも言えるが、釈然としない。
「「鈴菜はどちらでしょう」」
しつこい。
「そっちの方だ」
顔も格好も体格も同じでは区別のつけようもないので、適当に一方を指さすと、
「お見事」
と、眼帯を外してすっと一礼された。当たっていたようだが、まあ五〇％だからな。偶然以外の何物でもない。
「御褒美に使用済みの眼帯を進呈いたします」
「いらん」
誰が欲しがるんだそんなもの。そんな特殊なフェチだと思われているのだろうか。

「こちら、姉の撫菜(なずな)です」
眼帯を残してる方がぴしっと右手を挙げる。
「んちゃ」
なんとなくナチス風だなと思わなくもないが、それにしては勢いがなく声も淡々としている。
「そうか」
としか反応の返しようがなかった。
挨拶も名前も些細なことだ。ここで大切なのは、スズナもナズナもダンの同類だということにつきる。
わざわざ声を掛けてきたからには何か知っているのだろう。少し探りを入れてみる事にする。
「それでお前ら、何の用だ」
「淑女のたしなみ、男漁りですが何か？」
「絶対に嘘だ」
どんなに真面目な表情をしていても、スズナの発言はまるで信用ならんという事だけは分かった。
「さしずめ淑女ってのも嘘だな」
それっぽい態度こそとってはいるが、どこかおかしい。異国人のダンにもそのぐらいは分かる。
「そんな、ひどい。あんまりです。よよよよ……っぷ、ぷぷ」
やや幼いが落ち着いた美貌がにやにや笑いに浸食されていく。
「ぷっはっは。あー無理、歯が浮く、むずがゆいって。もー限界っ！」
スズナはすぐに腹を抱えて笑い出してしまった。神秘的なイメージが、からっとした脳天気さへと一変する。
「まったくダンは失礼なやつだなー。でも許してやるぜ、スズナってばヤマトナデシコだから。うっしっし」
背伸びしたスズナが肩をばしばし叩いてくる。馴れ馴れしい。
「うほっいいカラダ」
「おい」
抱きつくようにしてべたべたと身体を触ってくる。昨日よりさらに馴れ馴れしい。
「見せびらかすには最適だね。ダン氏はもっと薄着した方がいい。タンクトップがおすすめ」
「失礼なのはそちらだ」
こいつの態度はいちいち予想外すぎる。頭痛がしてきた。
どういうリアクションを期待されているのか分からない。
とりあえず親父の仕草を真似て大げさに肩をすくめてみたが、それで目の前の問題が解決するわけではない。
「人見知りのリンリンがもう慣れてる。さすが南蛮渡来、一味違う」
姉のナズナが冷静な口調で淡々とそんなことを言う。
そんな事を褒められても困る。いや、褒められていると解釈してはいけないのか？　日本語の微妙なノリはつかみきれない。
「一応、遺伝的には日本人も入ってるのだがな」
だいたい、人見知りが初対面の異性の身体を臆面もなく撫で回すものか。
「リンリンは大勢の前でもアガらないのに、面識のない個人相手はからっきし。反応が読めないので空回りが怖いと思われ」
「滑りもしなければ空回りもしない！　断じてしない！」
ダンの発言には応えず話したいことだけを勝手に話すナズナに、スズナが根拠のない勢いだけの反論を返す。

ナズナの意見には納得できる。スズナは基本的に暴走タイプのようだから、堅くてノリの悪い相手にはさぞかし相性が悪かろう。しーんと静まった気まずい状況にこいつが耐えられるとは思えない。

ならば、奇行に対して反射的に突っ込んでしまったせいで興味を惹いてしまった、という可能性もある。

「……俺を同類だと認識してちょっかい出してきた、というわけではないのか？」

「さしずめダン氏もアホの子と？」

「断じて違う」

妹相手に容赦ないな。

それはともかく、さすがにアホ呼ばわりは聞き捨てならなかった。

「いい男が嫌いな女の子はいない。ホモが嫌いな女の子もいない。そしてリンリンは本当は七瀬鈴菜というのだぜ、おかしいねリンリン」

話の繋がりが理解できない。彼女の言葉は微妙に不自由にも感じられなくもないし、時々本格的に理解に苦しむ。

だが、自分の日本語にそこまで自信を持っているわけではないから、そうそう批判じみたことも言えない。祖父とは常に日本語で話していたとはいえ、こちらに棲むのは初めてである。若者のスラングが分からなくても仕方あるまい。

「ならばリンリンよ、どうして俺の名と顔を知っている」

同類に違いないこいつらの方からわざわざ接触してきたのだ。さしずめダンの問題とも関係あるのだろう。まさかとは思うが、出生の秘密を知っているとかではあるまいな。

父にしろ母にしろ祖父母達にせよ、尊敬に値する善良な人間ばかりだ。彼らの誰かと、ことによると全員と血縁がない事が判明するなどと想像するのは、決して気分の良い事ではない。

しかし、ダンは知らねばならない。アイデンティティーの問題にケリをつけねば。このまま惰性で人間社会の中を歩んでなどゆけない。

「何を企んでいる？　なぜ俺に近づいた？　他に俺の何を知っている？　そしてお前達は一体何者だ？」

リンリンに続いて、ナズナの方にも睨みを利かせる。大人げないと思いつつも、意識して殺気を練り上げ精神的圧力を掛ける事までやる。

「ああ私のことはペンペンと」

眼帯女はそう言うと、どこからともなく取り出した掌大の「それ」を振り上げる。

「でも今日のところはおいとま」

「また合おうダン君、ふはははははは！」

アスファルトに叩き付けられたのは閃光手榴弾（スタングレネード）だった。

閃光が収まったときには双子の姿はない。ペンギンのマークの小旗が一本翻っているだけ。

「都合悪くなったら逃げおった！」

どうしてそんなモノを持っているのかは別にしても、こんなところで使うなど傍迷惑すぎる。

案の定、商店街や屋台のおじさん達が血相を変えて飛び出してきた。

「おいおい騒がしいなあ」

「なんだなんだ！」

「出入りか⁉　そうか出入りだな‼」
皆手に手にバットやゴルフクラブを持っており、いかにも堅気ではなさそうな人物ばかり。こうした手合いの纏う雰囲気は万国共通で、日本もその例外ではないようだった。
「ああんボーズ、てめえの仕業か」
「おう、どこのチームのやつだ？」
体格で勝り顔立ちも異なるダンに臆することもなく詰め寄ってくる。リンリン達といい、異質から距離をとりがちな日本人らしくない。ただの怖いもの知らずかもしれないが、得物と人数で勝っており気が大きくなっているのだろうか。
なんともガラが悪い商店街と呆れるばかりだが、裏通りにたむろしているチンピラどもはともかく、ここに居を据えている住人ならば官憲とのトラブルは避けるものだ。わけもなしに暴れたりはしないはず。
ダンが騒がず焦らず小旗を指し示すと、非堅気住人達はたちまち彼への興味をなくしたようだった。
「なんだよ、いつものやつか」
「それじゃしかたねえな」
「まあ、リンペンだしな」
彼らは状況を把握するや表情をゆるめ、ため息をつき、あるいは頭を掻きつつ自分の店へと引き返していく。
どうしてそれで納得できるのかはさっぱり分からないが、少なくともこの人々が彼女達を知っている事だけは確かだ。
「もし、そちらのご老人」
杖を持った老人に声を掛けてみた。彼は先ほどから少し離れたところで様子を眺めており、しかも終始落ち着いていた。話を聞く相手としては最も適切だろう。
「何だね、古風なしゃべり方のガイジンさん」
じいさま相手にはこんな感じにしゃべってたものだが、これって古風だったのか。
「ご存じならお聞かせ願いたいのです。あのリンリン・ペンペンとは何者か」
「ほう、やっぱり七瀬の嬢ちゃん達の知り合いかい。一体どういう関係かの？」
こちらが質問されてしまった。
「格別に深い知り合いではないが、どういうわけか昨日も今日も絡まれた次第。あれらは一体」
「顔役、だよ。ここいらのね」
老人は、にやりと笑いを浮かべた。
「絶対に敵に回しちゃなんねえ、スジもんよりもずうっと怖い人たちの秘蔵っ子だ。大きな病院の跡取り娘でもあるしな」
純粋な日本人でないダンゆえだろうか、彼の言うことは十分には理解できなかった。医者がある意味マフィアより怖いというのは同意できるが。
「あの娘らに気に入られたとは災難だ。これからも振り回されることになるだろうよ。まあせいぜいがんばりな」
肩に置かれた手には、かつて祖父からうけた薫陶に近い何かがこもっていたような気がした。ただの錯覚、ホームシックの顕れでしかないかもしれないが。
それでも。
ダンが本当のダンになるためには、どんな理不尽からも逃げる事は許されない。

「お前が何を求めているのかはよく分からん。だが、求めるものがあるのならば、決して逃げるな。あらゆる出来事には意味があるはずだ。よく見て、選んで、つかみ取れ」
とはじいさまの言葉だが、ダンは自ら納得してその言葉に従っている。探し求める何かに繋がるヒントは、何処に存在しないとも限らない。
そんな主義を抜きにしても、同類とおぼしき彼女たちがダンのルーツに繋がる可能性は決して低くないはずだ。
理由は分からないが、運命の方から飛び込んできてくれているというのに捕まえ損なうとは、ダンらしくもなく受け身だった。
意志が燃え上がるのを感じる。今度見つけたら絶対に逃がさん。
「おうおう、気合い入ってじゃねえか。若ぇのはそうでなくっちゃな」
激励してくれるのは良いのだが、ばしばし肩を叩くのはやめて欲しかった。筋骨隆々のこの爺さんにはどう考えても杖なんか要らなさそうなものだが。

「もしもし、そこなお三方」
翌日の登校中。何とも妙な三人組を見かけた。同類とは少し違うようだが、いかにも普通ではないと感じた。さらに人間から遠い印象がある。
フランスでもアメリカでもブラジルでも、ヒトの真似事をするヒトではない存在とは何度も出会っている。今回もおそらくその類だろう。
危険は否定できないが、場所はいつもの商店街。
わざわざヒトの姿をとっているからには、少なくとも人目につく場所で本性を現すつもりはないだろう。
ここは積極的に動く事にする。
「？」
振り向いた男達は、胡散臭げにダンを見つめてくる。
三人が三人ともニット帽にパーカー・スニーカーという一見してチーマーっぽい出で立ちだが、大きく膨れたビニールの買い物袋を両手に提げているのがなんとも所帯じみている。
いずれも中年がらみ、しかも日本人離れした顔立ちだ。あえて言えば大陸系と言えなくもないが、個性が強いを通り越してデフォルメがきつい。言っては気の毒だが、だいぶ人間離れしている。
正直、化け方が上手くない。しかもケダモノ成分多めの悪人面だが、見た目だけで悪と断じるのはいかがなものか。ヒトであろうがなかろうが、初見の相手にはそれなりの敬意を払うべきだろう。態度を決めるのはそれからでも遅くない。
「貴兄ら、日本語は解されますか？　英語・フランス語・ポルトガル語は？」
「……日本語でおｋ。最近覚えた」
リーダー格とおぼしき猿顔の小柄な男が、面白がるような笑みを浮かべた。彼の言葉には多少訛りがあるが、問題なく聞き取れる。
「なるほど、お主がダン・ロシニョール殿か」
こちらはいささかぎこちないが（ダンとて他人のことは言えないが）、恰幅の良い豚顔の男がダンの名を口に出した。やはりリンリン達の関係者か。
「いや、そう警戒なさることもありませぬぞ。我々三名、こう見

えて人類の守護者に任じられておりますゆえに」
　両生類を思わせる顔の痩せ男が、顔に似合わぬ渋い声で言う。洗練された仕草はよく訓練された執事か、あるいは宗教家を思わせる。
「……そういう貴兄らは、一体何者なのか？」
「オイラは大聖。通称キャロット。石族の全権大使にして、白銀珠比女命（しろがねのたまのひめのみこと）の親衛隊を拝命してる」
　キャロット氏は顔や格好とはまるで似合わぬ優雅な仕草でもって、大陸風の拱手の礼をとってみせた。ダンの知らない固有名詞がいくつも出てきたが、ヒトに例えて言うなら少数民族の出身といったところか。
「こいつらはくされ縁の同志なんだが、姫神の寵愛を争うライバルでもあるな」
「ふむ、儂は元帥、猪族代表だ。ペパーミントと呼ぶがよい」
　豚顔改めペパーミント氏の声は重々しくはあるが、若干のコミカルさも感じさせる。こいつはきっとお調子者だと直感する。
「自分は深族の大将と申します。ファンネルとお呼びくだされ」
　眉間に深々と刻まれた皺を引くまでもなく、彼はきっと苦労人だ。
「「一人は彼女のために。みんなは彼女のために。我ら三名、人呼んで斗流三獣士」」
　三人はまるで示し合わせていたかのようにそう声を上げると、三者三様のポーズを決める。どどーん、と効果音が聞こえた気がした。
　一人一人の個性はバラバラな方向を向いているが、全体として一幅の絵画のような統一されたシーンを作り上げている。
　すなわち、彼らはよく訓練された一個のチームだ。とは言ってもチーマーのチームとは違う。
　あれだ。じいさまが好んで見ていた子供向け（語義矛盾だ）特撮番組にあった。
　じいさまの言葉を借りるならば、彼らはよく訓練された特撮マニアと言うことになる。すなわち、ヒトの文化に毒されまくっているダメ人外だ。
「その彼女というのはリンリン達のことなのですか？」
「そりゃ違うぞ。でも惜しい」
「本来儂らは直接姫神に仕える立場だが、今日は特に仰せつかって、『彼女』に代わって街を守護しておるのだ」
「正確には、ここのところ商店街で過ごすことが多いリンリン・ペンペン殿が『彼女』の民に迷惑を掛けぬようにと、影から監視しているのです」
　だいぶ雲行きが怪しくなってきた。
「彼女らはどうしてもトラブルを引き寄せますからね」
　実感のこもったファンネル氏の言葉に、キャロット氏が何度も頷く。
「素手喧嘩（ステゴロ）最強の噂も高いリンリンに挑戦したがるチーマーがひきもきらねえしな。どうせ取り合ってもらえないんだが」
「かつて世界最強を目指した師兄も腕が鳴るんじゃあ？」
　ペパーミント氏がからかうように言うが、キャロット氏は心外そうに鼻を鳴らす。
「若い頃はだいぶヤンチャもしたものだけどな……そいつはきっとオイラの記憶じゃないんだろうからなぁ」
「確かに我らの有様は不自然すぎます。まるでおとぎ話の登場人

物だ。相当の改変を受けた結果と判断すべきでしょう」
「それでも儂らにまっこと相応しいだろう。これ以外の設定はありえんとすら思えるぞ」
「設定言うなよ。オイラ達にとっては確定された歴史なんだぜ」
「では、授けられた運命、とでも言っておきましょうか。今は『彼女』こそが我らにとっての如来尊師ですから」
「そいつぁいいな。そういうことにしておこうか」
特撮番組の悪の組織の幹部を彷彿させる怪人達が、獣じみた声で抽象的な会話に興じる様子には激しい違和感を感じる。
詳細は分からないが、随分とメタ的な事を話し合っているようだ。この要領の得なさからは、主治医のアリス先生の会話を思い出させる。
ダンにとってはまるで要領を得ない会話はその後も続いていたが、
「おっと。いささか話が逸れてしまいましたな」
完全に忘れられたと感じた頃。幽鬼を思わせるファンネル氏がこちらに向き直り、
「とにかく町の安全については自分達が請け合いましょう。安心めされよ。ダン殿は思う存分お二方にお付き合いされるがよろしい」
と宣った。
発言内容の詳細は分からないが、やはり彼らはヒトの味方という事になるようだ。
だが。
理性は彼らを敵ではないと判断しているが、この連中を野放しにしてはいけないという衝動がわき上がる。
高度の知性や理性は必ずしも安全性を保証しない。ひとたび敵に回った場合の危険性は、凶暴なだけの猛獣よりも遙かに高い。
リンリン達の信頼を得ておいて、その実は寝首を掻こうと企んでいる可能性もあるのだ。
いや、理屈ではない。
とにかく我慢できない。
ダンの感情は当初から彼らを敵と判断していた。こんな連中がこの世界に存在しているという、その事実にたえられない。
「おっと、やめときな坊や」
が、ダンの固めた拳をキャロットがめざとく見つけた。
「いきがるのは若者の特権だけどな、相手を見てやりな」
やはり只者ではない。闘争に関する勘が半端ではない。
「今の儂らは買い出しの最中。大切な荷物を抱えたままでは手加減も思うようにならんぞ。暇な時なら腕試しに付き合ってやらんでもないが」
「リンリン・ペンペン殿のお気に入りを傷つけるわけにはいきません。ここは手をお引きになってくださいませんか？」
この三名は文字通りのバケモノだ。多少なりとも心得のある人間ならはっきり分かる。
しかも一対三。多少は腕に覚えがあるダンとはいえ、単純な武力で対抗することは困難だろう。
だが、理屈ではない。
こいつらは人里の熊、海水浴場のサメ、そしてサーカスの猛獣だ。今は共存できているように見えても、少しでも気が変われば容易くヒトに害を及ぼす。自分がそうであるように。
バケモノが完全に自制できるなどと、信じられるものか。

潜在的な悪はそれだけで予防的措置の対象とすべきだ。どんな手段に訴えても滅ぼさねばならない。それがダンの信念だ。

例えば。

こいつら言うところの姫神とやらの身柄さえ確保できれば、こいつらを煮るなり焼くなり好きにできるのではないか。しかしかんせん、姫神とやらについての情報が絶対的に不足している。

次善の策として、リンリン・ペンペンはどうだろうか。ある程度の効果は期待できるだろう。リンリンはそれなりに腕っ節が立ちそうだが、正式にカラテを学んだダンならば取り押さえられるだろう。

「それでいい。もう馬鹿な気を起こすなよ、少年」

ダンが拳を解いたのを見て取ったペパーミントは、豚顔ににやりと笑いを浮かべると、そう言い残してきびすを返した。

キャロット、ファンネルもまた、ペパーミントに続く。

絶対の自信があるのだろう。背後からの襲撃の可能性を気にも掛けていない。

愚かなものだ。何百年生きているのか分からないが、強さが腕力や戦闘技術だけだと思っているのだろう。

本当にそうならば、この世界はとっくにバケモノのものになっているはずだ。古来より人間は知恵を振り絞り、力で勝るバケモノ達の中で生き延びてきた。

戦略的撤退など、奴らには思いもよらないだろう。

今日のところはこの世の春を謳歌させておいてやる。だが、いつまでものさばらせはしない。

ここ数日というもの、ダンはあえて通常とは登下校のタイミングをずらし、リンリンやペンペン、そして例の三人組との遭遇を回避してきた。

そして一通りの準備を終えたこの日、ダンは家路を急いでいつもの商店街に向かった。あんパンと牛乳を仕入れ、小さな公園の隅の滑り台の上に陣取る。

都合良く商店街が見渡せる、監視にも逃走にも最適の場所。

リンリンかペンペン、あるいはその他の人物でもいい。あの三獣士に対する人質、あるいは餌になる人物を確保できれば良いのだが。

主治医のアリス先生によるならば、この町の管理者達はバケモノ退治のオーソリティーだという。直接会ったことはないものの、ダンの身元引受人の四三揺子（しそうようこ）氏は、鬼を狩る一族のうちでも中枢に近い立場にある人物とも聞く。なのになぜあんな連中を野放しにしているのか。腹立たしい限りだ。

怒りを圧し殺し、栄養補給を行いつつ観察を続ける。

ほどなく、商店街の隅で爆音が上がった。

交通事故か？　と目をやると、俄には信じられない光景が視界に飛び込んできた。

次々と連鎖的に崩れつつあるブロック塀の上を、ツーテールにミニスカートのメイド姿の少女が駆けていく。

「リンリン？」

一人ではない。二つの人影が彼女の後を追っている。

素晴らしくこなれた身のこなしで駆け、跳び、壁を蹴り。機を織るように交差しては、援護し合い死角を補っている。よく訓練された者の動きだ。

これで頭巾に黒ずくめなら、噂に伝え聞く本物のニンジャと思ったろうが……追っ手の二人もまた、メイド姿だった。
確かに格好こそ一風変わっているが、先ほどからの動きを見る限り中身は本物に違いない。ニンジャの技術たるカラテを身につけた、すなわちくノ一だ。多少なりとカラテを学んだダンの目はごまかせない。
追っ手二人はリンリンよりも頭一つ背が高い。ともに落ち着いた容姿の美人達で、身につけた服もリンリンのものよりスカートの長い大人しめのデザインだ。日本人の容姿は他国民より一回り以上は若く見えるものだが……おそらくは高校生かそれ以上といったところか。
「待ちなさいリンリン！」
「そこになおりなさい！」
ともに長い髪をサイドテールに結んでおり、反対側の手に長手袋をはめている。二人は鏡写しのように左右反対で、見ていると幻惑されそうだ。おそらく彼女達も双子なのだろう。
「待てと言われて待つやつが居るかっての！」
逃げ出した見習いメイドを先輩二人が捕まえて懲らしめようとしている、と言うにはだいぶ無理があるか。
市街地を縦横無尽に飛び回る三人の動きはまるでパルクールだ。活動的とは言いがたい午後服が似合わないことおびただしい。
何をやっているんだ、あいつは。
「勢い余って郵便ポストを壊したリンリンが、しのりんに叱られるのが嫌で逃げ回ってる」
「！！！？？？」
同じくミニスカートメイド服のペンペンことナズナが背後に立っていた。
見事に気配を隠すものだ。さすがは同類。
「やけになったリンリンを野放しにしておくと被害が拡大する一方だけど、初ねえ・終ねえがキレたらもっとヤバい。捕まえるのに手を貸して欲しい」
知らない登場人物が多くて困るが、だいたいのところは理解した。
しかし、毎回変わる服はともかくとして、
「昨日と眼帯が違うようだが」
現在彼女が身につけているのは、ポップなペンギン柄の彫り込まれた刀の鍔という奇っ怪な代物だ。
「たくさん集めてるから。眼帯コレクション、略して眼これ。なんちゃって」
どうやらジョークらしいが、何が面白いのか分からない。ダンが純粋な日本人でないからだろうか。
しかし不思議なものだ。あのバケモノどもに対して人質として有効であろうペンペンを捕らえる絶好のチャンスなのだが、そういう気になれない。
確保すべきはリンリンの方だ。なぜかそう確信された。
「で、俺は何をすればよい？」
「まずは二手に分かれる。私がリンリンの注意をひきつける。あとはダン氏が熱き魂の命じるままに上手いことやる」
……こういうのは日本語ではザルとかいうのだったか。
先日の口ぶりからすると、三獣士達は決定的なカタストロフィを防ぐための保険だ。ならば距離をとって密かに見守っているに違いない。リンリンペンペンはそこら辺の事情は知らされていな

いとみた。
そしてダンは今まさにペンペンと二人きりになっている。つまり彼はまるで警戒されていない。
昨日あれだけ殺気をぶつけたというのに、舐められたものだ。だがむしろ好都合。
まるで運命が彼のためにお膳立てを整えてくれているかのようだ。
「了解した」

タマサカにはアリス先生やカラテの師匠のような連中がごろごろ居る。
ウイ・ツイと呼ばれていた二人のカラテの腕前も相当のものだ。塀の上をビルの壁を、また民家の庭木の梢をも地面のごとく駆け、リンリンを追っていく。高度な軽功を苦もなくこなすとは、相当の手練れだ。
さすがに手加減はしているのだろうが、折り紙の手裏剣が幾度となくリンリンをかすめて飛ぶ。紙といって馬鹿にはできない。弾かれることなくアスファルトに突き刺さっているところを見ると、気への適合性を向上させた特殊セラミックペーパー製とかではなかろうか。ニッポンの先進技術とニンジャの秘術の融合で作られた最新武装に違いない。
それを意にも介さず駆け続けるリンリンの精神の強さも只者ではない。背後から投じられる飛び道具を意識しては足が鈍る。ランダムな回避運動を織り交ぜつつ全力疾走するのは正しい対処法だ。だがそれを実践するのは簡単ではない。
さすがはカラテとニンジャの本場ニッポン、そしてその霊的中心地と言ったところか。
それでも。リンリンのやつがあまり物を考えていないのは明らかだ。
ウイ・ツイの巧みな誘導によりついには旧市街の寂れ果てたシャッター街に誘い込まれ、ついに挟み撃ちされるに至る。
「さあ、年貢の納め時です。七瀬鈴菜さん」
「今や貴女は完全に包囲されています。大人しく武器を捨てて降伏なさい」
降伏勧告に対し、両手でメガホンを作ったリンリンはわざとらしい声色で叫んでみせる。
「我々はぁ絶対にぃ官憲のぉ横暴にはぁ屈しなぁい!!」
追い詰めているはずのウイ・ツイの表情には緊張感がある。このこの状態にあってもリンリンにはまだまだ余裕がありそうだ。だが。
双子だけあって行動パターンは把握済みということだろう。現にリンリンはこうしてペンペンの予言通りの場所に追い込まれてきた。
ペンペンは慎重にタイミングを計り、待ち伏せていたビル二階の窓からダイブ。頭上の死角からリンリンに飛びかかった。
が。
「ヒャッハー！　ふーじこちゃーん！」
わざわざ声（しかも、らしからぬ奇声を淡々とした棒読みで）を上げるなど、こちらから奇襲を知らせてやるようなものだ。
「Ｂｌｕｅｔｏｏｔｈ、お前もか！」
が、さすがは双子、無駄に息が合っているというべきか。迎え

撃つリンリンもまた軽口を叩きつつ、しっかりペンペンに付き合う。
素直に躱せば良いものを、素晴らしい反射神経でもって咄嗟に急角度の回し蹴りを放ち、姉を迎撃。落下中で回避行動が困難なペンペンは再び二階まで蹴り飛ばされた。
いや、いかに軽い女子中学生でも、今の吹っ飛び方はいくら何でも異常だ。ペンペンは軽功を用い、妹の蹴り足を踏み台にジャンプして仕切り直しを計ったのに違いない。
高度な技術が投入されているわりには迂闊で無駄に見えた一連の攻防も、しかしまったく無意味というわけではなかった。
上空への逃げ道も封じられている事を思い知らされたリンリンの次なる行動は……
目だけを動かして周囲を伺ったリンリンとダンの視線が合った。一つ頷きを返してやる。
次の瞬間、リンリンの足下に次々とスタングレネードが転がった。おそらくはスカートの中にでも仕込んでいたのだろう。適当に見えてなかなか用意周到だ。
閃光と大音響。
このことあるを予想して目と耳を塞いでいたダンは、視界が回復するや即座に行動に移った。

追っ手三名の前には開いたマンホール。
「なんて古典的な」
双子のメイドの片割れが、地下から流れ出してくるカビ臭い空気に顔をしかめる。
「珠坂の下には本土決戦のため張り巡らされた巨大地下迷宮が存在するとか、しないとか」
もう一人も、薄暗く湿っぽい地下空間に対する嫌悪感を隠そうともしない。
「それ、さおりさん情報でしょう？」
「ええ。白ワニとか殺人トマトとか言ってる時点で全然信頼できないけれど、無視するわけにもいかないわ」
既に結論は出ているが、行動に移す気がしないといったところか。いかにも育ちの良いお嬢さん方では無理もない。
「汚物は火炎放射で消毒？」
ペンペンが暗い穴の中を指さして、そんなことを言ってみせる。
「いえ、あの、お姉さんなのですからもう少し妹さんをかばってはいかがです？」
「俺の妹がそんな簡単にくたばるはずがない」
「信頼ってわけですね」
「姉より優れた妹などいない！」
「「……ならペンペンからお先にどうぞ」」
「お、おうっ？」

メイド姿の三人がマンホール内に消えたのを確認して、目配せを送る。
「ほんと真面目で仕事熱心だよね。ご苦労さん。うっしっし」
物陰から顔を出したリンリンは、悪戯っぽい表情で姉達の苦労を笑い飛ばした。
「だいたい、郵便ポストの一つや二つで細かいよねぇ」

公共の施設を破壊してはまずいだろう。だが、何を使ってどうやったかまでは尋ねまい。
それにしても、実に器用に気配を消せるものだ。こういう追いかけっこの経験も一度や二度ではないのだろうな。
「このたびは大変お世話になり感謝感激雨霰の行ったり来たりなのですが、しかしてダン氏はどうしてここに？　噂に聞く白馬の王子様？」
残念ながらそうではなかった。
リンリンにとってはむしろ悪魔の手先であろう。
しかしこれも正義のため。ここは心を鬼にせねばならない。
幸い、リンリンは一片の警戒心も見せず、ダンのすぐ近くに立っていた。
一歩踏み込むと同時に足を絡め、襟をつかんで押し倒す。
声を上げさせるまもない。一瞬の大外刈りで一気に意識を刈り取った。
面倒なことに下はアスファルト。落とし方によっては命に関わりかねないし、ここで彼女に怪我をさせるのは本意ではない。幸い、最低限の打撃力で上手いことやれたと思う。
「ふぅ」
既に一仕事やり遂げた気分だが、これは第一歩に過ぎない。
リンリンの手足をロープで縛って目隠しと猿轡を噛ます。もちろんロープには布を介し、肌に傷をつけないように配慮した。
中学生の少女だけあって軽くて作業自体は簡単だったが、華奢で柔らかい肢体に触れているとだんだん妙な雰囲気になってくるのが困りものだ。
『これは餌、ただの餌』
口を開かないでいればとても愛らしいという点を否定するものではないが、ダンは決してロリコンではない。
他意はないからこそ、スカートが短くて困ったものだとさえ思っている。
これは女の子などではない。人に化けて紛れ込んでいる怪物どもを釣り出すための生き餌だ。そう割り切らねばやってられない。
某廃工場までペパーミント・ファンネルを連れて非武装で来い。さもなくばリンリンの安全は保証できない。
以上の内容のメールをリンリンの持っていた携帯電話から「キャロット」のアドレスに送った。
どうやって人質を確保し、どうやって人目につかないように移動するかが最大の問題だったが、よりにもよって餌の方から狩り場のほど近くにやってきてくれたわけで。今日のダンは間違いなくツイている。
既に準備は万端、狩り場には餌と罠を仕掛けてある。
まったく、実に都合の良いところに、おあつらえ向きの廃工場があったものだ。
利用できるものは利用し尽くす。それが偶然であっても。幸運は最大限に利用されて始めて幸運としての価値を持つとは、アリス先生の言葉だったか。
ほどなく。
三獣士を自称する猿顔・豚顔・両生類顔の三体が廃工場の前に現れた。予想以上の素早さだった。

駆けつけたわけでも車で乗り付けたわけでもない。気がついた時には、忽然と、音もなく、立っていた。
「ほう、隠行（ステルスモード）中の俺達の気配にもう気づいたか」
「なかなか敏感なやつよ」
「ペンペン殿や宮藤姉妹を謀った人物です。一筋縄ではいきますまい」
奴らは余裕たっぷりの態度を崩さない。なめられたものだ。
以前の彼らの発言からすると、もともと密かにリンリンを見張っていたのかもしれない。
だが、この場所に仕掛けられた罠については知らないはずだ。
「意外と早かったじゃないか」
とのダンのつぶやきにも、
「そうでもねえさ」
猿顔のキャロットは頭を掻き、苦笑を浮かべる。
「あのリンリンがただの人間に不覚をとるなんて、誰も想像もしなかったぜ」
「まさに想定外というやつですよ」
両生類顔のファンネルが眉間の皺をさらに深くして、嘆息する。
「おかげで十家は大混乱ですよ」
ふん、とペパーミントが鼻を鳴らす。
「とは言っても誰も心配なんぞしてはおらんのだがな。はっはっ」
軽薄な笑いに、改めて怒りがわき上がる。
「ともかく、姫神様からは我らに一任するとのお言葉を戴けたのでな。要求通りこうして我らだけで参ったのだ」
「悪いことは言いません。ここは大人しくリンリン殿を放していただければ、これ以上大事にならなくて済みます」
ファンネルの言葉は慇懃だが、脅迫以外の何物でもない。
この状況が上層部に伝わっていたとして、その連中が本当にリンリンの安全を考えているのなら、こんな奴らに全権委任されるはずがない。
本来なら排除すべきこんなバケモノどもまで手駒にしながら、少し人外の血が混ざっている人間を利用するだけ利用しておいて使い捨てる。
この地に巣くっているのは、そういう組織なのだ。
あるいは、人質ごとまとめて処分する事さえ計算に入っているかもしれない。
「リンリンはおねんね中だ。会いたければ一列に並んで両手を挙げて倉庫に入ってこい」
「おう、分かったぜ」
積み上げられたコンテナの隙間に隠れたダンのつぶやきがちゃんと聞こえているようだ。バケモノどもめ。
「こんな感じでいいか？」
「道理であの強烈な気配がたどれんわけだ」
「こうした緊急時の集団行動に際しての三つの心得を聞いたことがあります。確か、押さない引かない顧みない、でしたか」
実際のところはダンも寡聞にして知らないが、ファンネルの言う三つは間違っていると断言できる。
「なるほどな。余計なことを考えずに一定の間隔を保ちつつ整然と動けば、混乱なく最高の効率で移動できるってわけか。人間も上手いこと言うもんだ」
キャロットは勝手な解釈で感心していたが、

「余計なことをしゃべるな！」
「「おーっす」」
だみ声が唱和した。
こいつら、緊迫感がなさすぎる。人質を取られているというのに。どんな危険が待ち構えているとも分からない場所へと無防備に誘い込まれているというのに。
事実、シャッターの開いた倉庫の中へと馬鹿正直に歩みを進めて来ている。三体の並びを列車に見立てているのか、両手で蒸気機関車のコネクティングロッドの動きを模しているのがこれまた腹立たしい。
「「しゅっぽしゅっぽしゅっぽぽしゅっぽ」」
そして三獣士どもは仕掛けワイヤーにことごとく引っかかっては次々と罠を発動し、
唐辛子粉末を顔面に吹き付けられ、頭から硫酸を浴び、植物性・動物性の種々の毒物を塗りつけた竹槍球の打撃を喰らい、落下する鉄骨を頭で受け止め、
三人が三人とも、ひどく汚れながらも平然としていた。
なんたることだ。個人戦闘能力で敵わないことは端から承知していたが。
こんな事なら自衛隊の駐屯地から対戦車ロケットでも失敬しておくべきだったか、と準備不足を後悔しているところに、
三獣士の先頭に立つキャロットはわざとらしく舌打ちして頭を掻き、
「おう、ダン。お前の攻撃番はここまでで良いのか？」
と嘯いてみせた。
カラテの師匠直伝の極悪トラップは、一つ一つが必殺の威力を備えている。それを躱すでも防御するでもなく全部受け止めてみせるとは。
プロレスでも気取っているつもりか。バケモノの分際でまた人間の真似事だ。
「儂ら頑丈なだけが取り得だからのう。蚊に刺されたぐらいのものだ」
「もう種切れでしょう。出来るだけ早くリンリンさんから離れてください。これは貴方のためを思っての忠告です」
キャロットが尊大ならペパーミントは豪放、ファンネルは慇懃無礼。態度は三者三様だが、いずれも挑発的だ。
ダンを、いや人間を舐めきっている。
ただ生まれついての頑強さでもって撥ねつけただけの連中が、思い上がりも甚だしい。
恐怖や畏怖を怒りが凌駕する。
ここからはどんな副作用を伴わないとも限らないが、もう出し惜しみはなしだ。
「【オン・マニ・パドメ・フーン】」
一つ目の呪符に解放の言霊を送ると倉庫のシャッターが落ち、同時に封印術式が倉庫全体を包み込むのが分かった。
脳外科医にして精神科医にして精魂工学者（この意味はいまだに分からない）にしてニンジャマスターという、アリス先生謹製の護符（アミュレット）が作動したのだ。
理屈はさっぱりだが、空間を隔離し、抵抗する者を拘束するという。これでバケモノだろうが逃げられない。
これで外部に迷惑はかけない。刺し違えてでもこいつらを処分すればダンの勝ちだ。

「……ガクガクブルブルガクガクブブル」
理由は分からないが、予定以上の付加効果まで発揮しているようだ。ダンとしては理屈も手段も問わない。ともかくこれで一名無力化できた。
「うわ、兄貴が固まっちまったぞい!?」
ペパーミントとファンネルのもともと良いとは言えない顔色が、さらに悪い方に変化した。
「大聖に対しては実に適切な、むしろ適切すぎる対処法ですが……いくら何でも準備が良すぎませんか」
そこはそれニンジャの秘術、アリスのやることだからな。
頭を抱えてしゃがみ込んでしまったキャロットを背にかばい、ペパーミントとファンネルは混乱しつつも素早く防御の円陣を組んだ。よく訓練された戦士の本能の為せる業だろう。
しかし、人質を取った相手への対処法としてはまったく適切ではなかった。
こういう場合、本来とるべき手段は奇襲あるいは強襲のはず。
ダンを見くびったりせず、最初から数と武力を頼んで突入してこられたら、それでジ・エンドだった。いや、今からでも損害にかまわず踏み込んでくれれば十分以上の勝機があるだろうに。
バケモノでも身内は見捨てがたいのだろうか。滑稽なものだ。
得物も持たず応援も呼ばず、十分な数を揃えることもなく。脱落させられた仲間に足を引っ張られ、徒に手を遅らせている。
ヒトを大きくこえる力を持つ者どもが、ヒトの真似をしたあげく、ヒトに劣る所行をなす。何という奢り、何という体たらく。
バケモノとしての意志を失ったバケモノは、ヒトにさえ及ばない。
しかして。バケモノに劣らぬ意志さえ備えていれば、ヒトの技術のみをもってさえ、バケモノ以上の事をなすことができる。
意識を失ったままのリンリンをかかえ、ダンは三獣士達の前にあえて姿を現した。
「うぉっ、なんと。知らんとはいえ恐ろしいことをするやつめ」
「本当に危険なのです！　彼女を解放して離れなさい、今すぐに！」
さきほどまでとは違う必死の形相。
ここまでして取り返そうとするとは、奴らにとって余程重要な人物とみえる。やはり彼女を人質としたのは正解だった。
ダンは一つ頷いてみせ、リンリンを丁重に床に横たえる。
それから再び立ち上がると三銃士達を睨みつけ、
「ペパーミントにファンネル！　ならば一つ聞かせろ！」
と鋭く声を挙げた。
「おう」
「なんですか」
かかった。
リンリンを下ろすと同時にこっそり足下に置いてあったオロナインCの小瓶を蹴る。
蓋をとられた不思議な不思議な茶色の小瓶は、コンクリートの床をペパーミントとファンネルの元へと転がった。
ころころ。ころころ。ぴたり。
二体は顔を見合わせて、
「「しまったぁ！」」
声を上げるとともにその場を飛び退こうとするが、時既に遅し。

彼らの存在する空間が渦巻きねじれつつ急激に圧縮されていき、錐を揉み込むように小瓶の中へと吸い込まれていく。

二体の姿は、数秒のうちに消え失せていた。

アリス先生の手に成るこの瓶は、名前を呼ばれて返事をした者を吸い込み封印する機能を備える。何とか言う中国の物語にヒントを得て作ったものだそうだ。

「ふぅ。よぉし！」

ダンは一つ大きな息を吐くと、緊張のあまり握りしめていた拳を振り上げ、打ち振った。

瓶の効果は確かに決定的だった。だが、確信があって使ったわけではない。

細かい理屈はどうでもよかった。有効であればそれでいい。効かなければ手持ちのアイテムを片っ端から試してみるだけだった。

副作用も考慮の外だ。まともな手段が奴らに効かない事は既に明らかだったのだから。

人類に仇なす怪物を葬ろうというのだから、多少のリスクを負うのは当然だろう。人間の尊厳を守る崇高な使命のためなら、命を賭けても惜しくはない。

そしてダンは賭けに勝った。

アリスにもらった道具に頼らざるを得なかったのは少し残念だが、そこは仕方ないだろう。

フィジカルで劣り寿命の短い人間だからこそ、群れ全体として技術を蓄積・継承・融通し合うのだ。卑怯もへったくれもない。

つまり、こいつらはダンにではなく人類全体との戦いに敗れたのだ。

とは言っても、実際に最前線に立ったのはダンである。人間を誰も傷つけずにバケモノの駆逐を成し遂げられたのは、彼の手柄と言っても許されるだろう。

ならば。

これで堂々と自分を誇れる。彼のような半端な裏切り者は、こうして人類のために戦うことで、初めて人類の中に居場所を与えられる権利を得るはずだから。

残る一体、キャロットは既に完全に戦意を喪失しており、膝と頭を抱えて震えている。抵抗しない相手であれば処分しうる道具のストックはまだまだあるし、ダンとしても手心を加えるつもりはなかった。

制服の内ポケットに手を入れる。ラップにくるまれた黒い丸薬が出てきた。

「一瞬で相手の周囲の大気を汚染する。相手は死ぬ」との簡潔すぎるメモがいかにもアリス先生的で要領を得ないが、とにかく致死的なのは確かそうだ。

投げつければいいのか、相手に飲ませる必要があるのか、それとも自分で飲んで使うのか、そこらへんがさっぱりだが。

「どうだ、リンリン」

完全勝利を目前にした興奮に当てられてか、気絶して床に寝かされている人質へと話しかけていた。

「俺達のような半端ものは、結局はどちらかに与するしかない。ヒトの中で居場所を得るには、ヒトへの忠誠を示し続けるしかない。バケモノを味方に引き入れようなんて馬鹿な考えはやめないと、いつか痛い目にあう」

半ば以上はダン自身が覚悟を決めるための言葉だったが、

「うーん、どうして炊飯器じゃないのかと小一時間問い詰めたい

ナリ」
と、期待していなかった返事がかえってきた。
振り返ると、彼女は苦虫をかみつぶしたような表情で(>~<)合掌していた。
「あと、みだりに正●丸とか出すのやめて。お願い。ほんと、マジ勘弁」
気絶した後で十分な量の薬をかがせたはずなのに、いつの間に目を覚ましていたのか。
だいたい、手足の拘束はどうなっている？　ついつい縛り方に手心を加えてしまったのかもしれない。
「いやー、それにしてもべっくらこいたよね。本当に中年隊に勝っちゃうんだもん。こりゃおじさん一本取られたな」
リンリンは純粋な日本人のはずなのに、彼女の日本語は相変わらず散漫で分かりにくい。
「でも、これ位でやめときなよ」
口調は軽いが、不思議な迫力が感じられる。
もしかして、彼女は怒っているのだろうか。
「気絶させたり縛ったりした件については個人的に謝罪しよう。だが、あれは公共の正義のための緊急的人権制限として正当性のある処置だった。納得してもらうしかない」
「リンリン的には別に全然どうでもいいんだけどねー。ダン氏こそ、保護観察中にあんまりオイタすると本格的に処分されるんでないの？」
さすがはここらの顔役といったところか。ダンの立場についての情報も得ていたとみえる。
「それはないな。バケモノに与して私腹を肥やしていた連中を懲らしめたのは、あくまでも正義に則った行為だった。表向きの法律との整合性をとるため、大義名分・方便として保護観察という形式をとっただけだろう」
「うわー、そう来たかぁ」
「いかにもアリス先生がやりそうなことじゃないか。現にこうして俺は、バケモノがいる珠坂に送り込まれてきたんだ。つまり、そういうことだ」
「確信犯かね」
「然り」
余計に刺激の強い場所での転地療養などありえないだろう。
バケモノと慣れ合ってしまっている珠坂の管理者達。そうした状況に一石を投じて健全化へのベクトルを与える。ダンはそうした役目を期待されていたに違いない。
「でもさー」
メイド服の少女は肩をすくめて見せた。
「キャロット達、別に悪いことしてないじゃん。しのりん護衛してくれてるし、邪魔しないようにちゃんと人間社会に溶け込んでるよ」
「だが、将来にわたってもそうだとは言い切れない。バケモノとしての本性を隠して人間に擬態するという行為自体、仲間と思わせて十分に油断させておき、いざとなれば人間社会を内部から瓦解させることを前提としている可能性があるだろう。そんなやつらをかばうようなら、リンリンもまた人類の敵と判断せねばならなくなるぞ」
「……可能性とか言い出したら、今この瞬間にだってしのりんとかクロヒメの誰かがブチ切れて珠坂を消し飛ばす可能性だってあ

りうるでしょ」
「その者達は幾分かでもヒトの血をひいているのだろう。疑われて当然の肩身の狭い立場の者は、不断の努力と行動でもって潔白を証明しようと努力しているはずだ。そうした不断の努力こそが人類の信頼を得る方法なのだから」
「具体的には？」
「人類の尖兵として外敵と対峙する。あたかも合衆国第四四二連隊のように」
「デ〇ルマンとか仮面ラ〇ダーね。まあ、確かにそんな感じではあるけどさ」
やはりここ珠坂でもそうした実例はあるのだ。
リンリンはしばし何かを考えていたが、上目遣いでダンの顔色を疑うように尋ねてきた。
「あのさー。純粋な同族だってそうそう信じられるもんじゃないと思うけど、ダン氏的にはヒトじゃない成分が混じってもオーケーなわけ？」
その意見には一理も二理もあるが、
「自分自身を否定しては何も始まらないからな」
自分の複雑な血の中には、ヒトではない何かが混ざっている。そう確信している。
「ダン氏？」
「他の人間にとっては何でもないはずの、誰かのちょっとした行動にいら立ちを覚えることがないか？　抑えきれない攻撃衝動に襲われることは？　俺にはある。生まれてこの方、常にバケモノの本能に振り回され続けてきた」
飾り立てた容姿や洗練された仕草で相手に与える印象を操り、言葉巧みに懐柔して手なずけ、自分に従う勢力を形成する。そして数の暴力でもって、自分達の都合が良いように事を運ぶ。世界のどこでも見られる、まことに普遍的な人間的行動だ。
しかしそうした行動に対し、ダンは激しい苛立ちと怒り・攻撃衝動をかき立てられてならない。
同族のリンリンにならきっと分かるはずだと、これまでに経験してきた数々の例を示して同意を求めた。
だが。
「それってさー、悪いけど」
リンリンはにやりといやらしい笑みを浮かべると、
「うまいこと世渡りできる連中が妬ましいだけっしょ」
などと侮辱的な台詞を言い放った。
「そんな下世話な感情とは違う！」
「怒った。やっぱ図星だ」
振り上げた手の振り下ろしどころがない。
「おっさんはめった打ちできても、半分バケモノの女子は殴れないかー。そうだよねー。ヘタレだもんねー」
うっしっし、と声を出して笑うリンリン。
悪魔かこいつは！
ここで挑発に乗ってはいけない。ダンがこれまで戦い続けてきた強大な敵が、実は自身の低俗な感情という事にされてしまう。そんなことは断じて認めるわけにはいかない。
「だいたいさー」
一本立てた右手の人差し指をくるんくるんと回しながら、少女は言う。
「ダン氏、別に鬼憑きじゃないじゃん。人種は混ざってるけどど

う見ても真人間です本当にありがとうございました。単にビビりで不器用で社会不適合な残念ぼっちがルサンチマンをこじらせてるだけっしょ。ハーフでもクォーターでもうまくやってる人はいくらでもいるのに、そのせいにするのは卑怯だと思われ」
「……んっっ！」
今度こそ抑えきれなかった。
無礼な少女へと詰め寄り、積まれたコンテナの角に追い詰める。
「おっと壁ドン初体験」
ずっと体の大きな男性に追い詰められているというのに、リンリンはけろりとした顔だ。
カラテの腕に自信があるのか。いや、それ以上に、ダンにはどうせ何もできないと思っているのだ。
「頼む、今の台詞だけは取り消してくれ。そうしてバケモノをかばえばかばうほど、リンリンが人類の敵だと自ら証明することになるんだ」
「自己欺瞞もここまで来るとご立派だけど、最後の砦に籠もったぼっち必死だな（藁）」
「なんだと」
「好きにしたらいいよ。殴るでも蹴るでも思いつく限りの変態的行為でも。反省も話し合いもできない本物のバケモノだって認めたいなら」
「挑発も良いが、俺がその気になったらどうするつもりだ」
「リンリンは抵抗しない。っていうか、できない。不器用だから人払いがうまく使えないんだよね。重機で殺さないように人間を取り押さえるとか、無理」
「……一体何を？」
「ダン氏も言ってたじゃん。鬼憑きは普通の人の役に立って、認めてもらえるように努力しなきゃならないって。今がその時だと思うんだよねー、リンリン的には」
「こんな茶番が俺のためだっていうのか？」
直後、余裕たっぷりだったリンリンの顔色が変わった。
「ちょっと状況かわったから、どうするか早く決めてくれると助かるな。真剣すぎるダン氏につられて『斧鉞』の防衛本能が目を覚ましちゃったっぽい」
「フエッ？」
「ダン氏をばらっばらにしたいって衝動を、いつまでも抑えていられる自信がございんのですよ」
リンリンの口から漏れ出す言葉は相変わらず人をおちょくるような調子だったが、内容がいかにも聞き捨てならないものになっていた。
しかも、常日頃の脳天気な声とは違う。最初にあった日のような柔らかく繊細な声色。
何かが起こっている。
リンリンが背中を預けているコンテナから、鈍い金属音が迸った。
「!?」
そこに刻まれていたのは、先史時代の恐竜が爪を振り下ろした、あるいは処刑人が大斧を撃ち下ろしたかといった様相の傷跡だった。
ダンは反射的に身構えつつ周囲を見渡すが、破壊をもたらした主の姿はどこにも存在しない。そればかりか、彼の目の前で破壊は続き、鈍い刃物でもって断ち割ったような傷が、床や天井にも

次々と刻まれていく。
カマイタチ、というには傷跡が雑にすぎる。
いまだ残存する三獣士のラスト一名の仕業かと思ったが、キャロットはいまだにフリーズ状態。おそらく無関係だろう。
だがどの傷もダンとリンリンの周囲にばかり集中して発生している。正体不明のバケモノによる破壊が無機物以外には危害を及ぼさないと考えるのは、いくらなんでも楽観がすぎる。そもそも偶然と片付けるには殺気があふれすぎだ。
まずい。まずい、まずすぎる。こんな見えない攻撃を勘だけで回避できるものだろうか。アリス先生からの餞別の中にも、現状に対応できそうなものはない。
しかし幸いなことに狙いが雑すぎて、今のところダンにもリンリンにも当たらないで済んでいる。それがいつまで保つかは分からないが。
いや。
「壊したいんだけど、殺したくないとも思うんだよね」
傷跡はどれも不自然に屈曲している。それこそ斬撃の軌道を途中で無理矢理ねじ曲げたように。
初期ベクトルのままであったならばと仮定するならば、どの攻撃も最終的にはダンを捉えていたに違いない。
そこには何らかの。しかも二つの相反する意志の反映が感じられた。
そして増え続ける傷の軌道は直線に近くなり、いよいよダンへと近づいてきている。
「ごめん。ほんともう限界」
いよいよ余裕が無くなったリンリンの表情からは、年齢不相応な達観と等量の自嘲が読み取れた。
信じたくはないが、この破壊を引き起こしているのはやはり彼女なのか。
ならば、リンリンが抱えているのは心理的・社会的な問題だけではない。物理的脅威を伴った何かだ。

そして気づいてしまった。
ダン自身がどう確信していようが、見た目がどれほど人間離れして恐ろしく醜かろうか、彼がバケモノの血を引いているという客観的証拠などどこにもない。
しかしリンリンは確かな本物だった。
そう腑に落ちてしまってはもういけなかった。もはや無条件降伏あるのみだった。
ダンの心理に関する彼女の指摘が本当であったとして、例えここで死んでもプライドだけは守るという選択肢はあったろう。
だが。
彼女は散々ダンを挑発したりおちょくったりはしたが、哀れむことだけはついになかった。たとえ中途半端なまがい物であったとしても、笑い飛ばされることはあっても哀れまれるような立場ではないと。そう励ましてもらったようなもの。つまり、リンリンは彼に対し終始好意的だったのだ。
だとすれば。ここでダンが死ぬような事があれば、手を下した彼女は一体どう感じるだろうか。
ああ、考えてみれば。家路でのわずか二三度の出会いで心を丸裸にされてしまったのだ。ダン自身も気づいていなかった部分まですっかりと。

すなわち、リンリンこそダンの真の理解者。
そんな彼女を苦しませる事に比べれば、ダンのプライドなどさしたる問題ではない。そんなもの犬にくれてやってもいい。そう思えた。
だから。
度重なる破壊の衝撃にたえかねて天井の一部が崩壊し。その一部が彼女の直上へと落下してきた時。
ダンの身体は勝手に動き、リンリンへと覆い被さっていた。
遠のく意識。後頭部から背中に打撃を受けたようだ。
こんなところで死ぬのか。
恩人さえ守れたのならそれも悪くないが、彼女の無事が確認できないのだけが心残りだった。

「ぐえっ、重っ。重いっつーに」
随分近くから声が聞こえてくる。澄んだ綺麗な音色だが、天使にしてはだいぶガラが悪い。
「へんじがない。ただのしかばねのようだ」
身体の下に身じろぎする何かの存在を感じる。天国の床は動くのか？
「おいこらダン、寝るな、寝たら死ぬぞ！」
声の調子が強くなるとともに、がっくんがっくん、と強烈に揺さぶられる。鍛えてなければ鞭打ちになっているところだ。
「ダン氏、死ぬなダン氏。リンリン勝手にかばって死んだら怒るぞこらー。泣くぞゴルァ！」
ああ、なんだ。良かった。リンリンめ、元気溌剌ではないか。
……ここに至りようやく意識がはっきりしてきた。
どうやらダンは生き残れたということか。今のところは、とりあえずだが。
全身に力を込め、背中にのしかかった瓦礫をなんとか押しのけることに成功した。
痛みはあるが体は動く。少なくとも致命傷は負っていないようだ。体を鍛えていて良かったとこれほど痛感したことはない。
それにしても、よくぞ。よくぞ生き残ってくれたものだ。
綺麗な顔をくしゃくしゃにゆがめた少女の表情が目に入ったので、その小さな頭を撫でてやった。
「うひゃっ！　こいつ、動くぞ！」
「本当に泣いてくれるとは、光栄だ」
「ここここれは、目にゴビ砂漠が入っただけでっ！」
ああなるほど。そいつは辛そうだ。
「お大事に」
「何がお大事だぁ！　死んでるなら死んでるって、生きてるなら生きてるって言え～」
「ああ、この通り生きている」
「遅～い！　アクビちゃんがアケビで殺せるほどスローロリス!!」
無茶を言うものだ。アリス先生といい、まったく女性というやつは非理論的で困る。
ダンはふらつきながらも立ち上がると、尻餅をついた体勢で意味不明の台詞をまくしたてるリンリンへと手を差し伸べた。
「お嬢様、お手をどうぞ」
「おっと、これはこれはどうもご丁寧に」

一瞬は落ち着いたリンリンではあったが、服の汚れを払い終わるとダンにぐいぐいと詰め寄り、再び素晴らしい勢いでまくし立ててきた。

「あっぶねーなおい！　真人間が鬼憑きかばってどうするよ！」

身長差をものともせず食い下がる様子は、下手すればダンに噛みつきかねない勢いとさえ思えた。

「鉄骨なんて痛くも痒くもないんだからさー。むしろ自動迎撃でダン氏真っ二つにしかねなかったんだぞ。反省しる！　謝罪と賠償を要求！」

だが、そんな事はわざわざ言われずともダンが一番良く分かっている。

「我ながら猛省の至り。この通りだ。はっはぁーっ」

郷に入っては郷に従え。日本人のやり方に従い、降り積もった瓦礫をものともしないエクストリームな土下座にて最大限の反省を表現する。

「お、おう」

「……俺は弱くてダメな人間だ。自分の心の黒い部分を認めたくないあまり、バケモノの血が混じっていると思いこもうとしていた。あげく、関係ないリンリンまで巻き込んでしまうとは、許されるならハラキリでお詫びしたいぐらいだ」

これまで否定し続けた恥を口に出して認める。それは死んだ方がマシなほどの屈辱だったが、これがけじめというものだろう。

「その通りだ。だが切腹は許さん。せいぜい生き恥をさらすんだなこのウジ虫。地上で最下等の生命体め！」

「いや、そこまでは言っとらんけど」

「では褒めてしんぜよう。ご主人様をよくかばってくれた、偉いぞー。よーしよしよし、おりこうおりこう」

散々罵倒されたと思えば、今度はぐりぐりと頭を撫でられた。犬か。

いや、今のダンの立場は犬みたいものだが。

「いいからさっさと立て！　じっくり可愛がって泣いたり笑ったりできなくしてやる！」

「あー、はいはい」

リンリンの暴走はとどまるところを知らない。

もともとイッちゃってる発言の多い娘だが、先ほどからのテンションの高さはいくらなんでも行き過ぎだった。

命に関わる状態にアドレナリンが出っぱなしなのだろうか。

「こいつはおまけだ。とっとけ」

あげく、ダンの首にとびつき、左の頬にキスしてきたのには本当に驚いた。

純粋な日本人にしては積極的にすぎるスキンシップである。どうせその場のノリでやったのだろうか、後できっと後悔するだろう。

そう指摘してみると、

「そう、ノリ。いわゆるツルハシ効果！　別に他意はないんだからねっ！」

他意アリアリに聞こえるのは、ダンの感情の反映なのだろうか。

ダンもまた、それこそ吊り橋効果の影響下にあるのだろう。ここは冷静になるべきシーンだった。

しかし、一度盛り上がった妙な雰囲気はなかなかクールダウンには至らず。

腕の中に抱きとめられたこのエキセントリックな少女の事を、

どうしても手放しがたくて仕方なく。
「あー、ゴホン」
だからこそ、どこからともかく聞こえてきた咳払いは、ダンにとっては邪魔物であると同時天の助けでもあった。
狼狽のあまり力をゆるめた途端、少女の姿は腕の中からかき消えてしまい。辺りを見回すと、リンリンは既にたっぷり五メートルも離れたところで口笛を吹いていた。何という素早さ。
「申し訳ありません。お二方におかれましてはお取り込み中とはお察ししますが、のっぴきならぬ緊急事態でして。実は足先がだいぶ溶けてきております」
茶色の小瓶から遠慮がちに聞こえてきたのは、だいぶこもってはいるがファンネル氏の声に間違いなかった。
「お手数ですが、できればここから出してはいただけないものでしょうか」
ダンはかの三匹の存在を完全に失念してしまっていた。リンリンも同じだろう。
「こう見えても我らは各部族の全権代理人を任じられております。我らと部族との連絡が途絶えれば大戦争の引き金にもなりかねませんし、それは我らの本意ではございません。もしダン殿がアルコールを嗜まれぬようなら、河童酒などより平和の方がよほど価値があると愚考しますが」
まったくもって一も二もなかった。
長年にわたるコンプレックスをようやく克服する事ができたというのに。ここでバケモノとの大戦争などに巻き込まれてしまっては元も子もない。
ダンは即座に捕獲の小瓶を叩き割るとともに、倉庫に施された封印の依り代である符も破壊した。
その上で、リンリンの活躍により強度に信頼を置けなくなった倉庫を離れ、近くの公園へと場所を移す事となった。
「見鬼とはいえただの人間相手、よもやここまでやられるとは想定しませなんだぞ」
「これほどのピンチは例の旅の時以来ですか」
ようやく一息ついたばかりで、くたびれ果てベンチにもたれ掛かるペパーミント&ファンネル氏相手に、リンリンは実に容赦なかった。
「慢心は轟沈の始まりだね、元帥・大将」
「リンリン殿の仰せの通り。我ら三獣士、猛省いたします」
彼らによればダンは少々霊感が鋭いものの、分類としてはまったく普通の人間に属するらしい。
自分程度の霊感であれば百人のうち二・三人は備えているという。それが本当なら統合失調症の罹患率よりよほど高い。
リンリンの指摘に続き、ダンが本質的に低俗で暴力的な人間であるという証拠がまた一つ提出されてしまった事になる。
つい一時間前までの自分であれば半狂乱になって怒っていたところだろう。しかし、今のダンにあるのは恥の感情だけだ。
そういう負の心性そのものよりも、原因のすべてを出自に押しつけて、自分自身の責任を否定し続けていた態度の方が余程恥ずかしい。
心の奥深くまで深く根を張っていたこだわりは既になかった。一度認めてしまえばそんなものだろうか。
「とは言っても、大聖師兄は当面復帰は難しいかも知れませんが」

「五行山がよっぽどトラウマになってると見えるのぅ」
　ペパーミント氏とファンネル氏によって倉庫より連れ出されてきたキャロット氏は、相も変わらず膝を抱えてガクブルしていた。栗色だった髪が見事なまでの総白髪に変じているところを見ると、余程のトラウマを刺激してしまったらしい。正気に戻ったらきちんと謝っておかねば。
「おーい、あれはバーッと動いてるけど彗星じゃないぞー。さっさと帰ってこーい」
　リンリンが馬鹿力でぶんぶんと揺さぶっているが、反応は芳しくないようだ。揺さぶりすぎの線もあるかもしれないが。
「頑丈な師兄のことだからいつかは復活するだろうが、何百年も掛かっても困るよなあ。いっそ姫神様に活を入れていただいた方が良いかも知れんのう」
　ペパーミント氏がそんなことを言い出す。正直なところあまり深刻そうな様子ではない。
「それナイス。しのりんとナナちんにメールしとくから、大聖は元帥と大将で運んでね」
「儂らの足は再生したばっかりなのですがなあ。しかもメイドさんがバケモノをこき使うってのは、どうにも筋違いに思えてならんがのう」
　冗談めかして言うペパーミント氏に、リンリンが舌を出して答える。
「残念。この格好はただのコスプレだもんね。本職の初ねえ終ねえとは違うよん」
「元帥師兄、ここはリンリン殿の指示に従いましょう。姫神様に命じられた以上、リンリン殿は我らにとって師父も同じですよ」
「そんな事は分かっとる。戯れに言ってみたにすぎんわい。しかし姫神様に直接お目に掛かるのはどうしても気が重いのう」
「同感です」
　三獣士の二人は顔を見合わせると、ため息とともに肩を落とした。その姫神様とやらは一体どれほど恐ろしい人物なのだろうか。
　結果オーライ以外の何物でもないが、人質としてリンリンを選んだのは望外の幸運だったのかもしれない。
「申し訳ない。我が不始末のせいで、返す返すも面倒をかける」
　既に人外生物に対する敵愾心は霧散している。
　自分がやらかしてしまったことを考えるならば。頭を下げずには居られなかった。
　この後ダンに代わってご主人様に叱られる事になるのであろう彼らには、そのぐらいの誠意を示してしかるべきだろう。
「いいってことよ。儂らにとってはこんなのは日常茶飯事だ。このような奇妙な立場に成り果てた儂らにとっては、物語と冒険こそ存在意義だからのう」
　ファンネルもまた頷く。
　そして二人はキャロット氏の腕をとって支え、左右から肩を貸して歩き始めた。
「こんな時こそ雲に乗れれば簡単なのだが」
「今の大聖師兄はろくに隠行もなさってません。これ以上騒ぎを大きくしては隠蔽班に余計な面倒をかけることになります」
「分かっておる。分かっておるが、歯がゆいのう」
　隠蔽班、か。
　バケモノにまつわる事件を社会の目から隠すために奔走している人々がいるのだろう。

あれだけ散々音を立てたというのに、誰も様子を見にやってこないわけだ。自分勝手な都合で多くの人に迷惑を掛けてしまった。反省するばかりだ。

すべての関係者への謝罪と感謝の念を込め、ダンは去りゆく三獣士に向かって深々と腰を折り、頭を下げた。

「さて」

公園にはダンとともにリンペン双子が残されたわけだが。

リンリンがご機嫌なのはいいとして、だ。

腕組みで仁王立ちする眼帯の少女には何とも説明しがたい迫力がある。

夕焼けの逆光の中でも、彼女の身につけたメイド服がリンリンのそれ以上に薄汚れているのが分かる。

……下水道を駆け回ったんだった。主にダンのせいで。

それはもう、怒って当然だった。

ペンペンに協力する振りをして裏切ったばかりか、リンリンや三獣士に危害まで加えてしまったわけで。

ダンの勘は当初から、ペンペンはリンリンと同等のバケモノであると警告を発し続けている。そもそも一卵性双生児だから遺伝的には同一のはずだ。

「フフフ、怖いか？」

怖くないと言えば嘘になるが、これはダンが当然受け入れるべき試練だ。

「いや、当然の権利だ」

恭順と無抵抗の意味をこめ、広げた両手を掲げる。この仕草は世界共通だったはず。

「その覚悟や良し」

ペンペンはそう言うと亀裂のような笑みを浮かべ、眼帯に手をかける。

先刻のリンリンの例からするとペンギン眼帯の裏から何が出てきてもおかしくないし、例えそれが謎の怪光線であってもノーガードで受け止めざるを得まい。

……死ななきゃいいが。

プロレスラーは偉いと改めて思う。

が。

「やらせはせん、やらせはせんぞー！」

リンリンが乱入。両手を広げ、ダンの前に立ちふさがる。

「どいてろリンリン！　……リンリンだと⁉」

「ダン氏を倒したければ、まずこの私を倒してから行くがよい！」

「くっ。リンリンを撃つことなどできぬ……」

わざとらしく崩れ落ち、地に両膝をつくペンペン。

何だこの小芝居。

「今日のところは妹の顔に免じて勘弁してやる。覚えてやがれ」

「そいつはどうも。かたじけない」

ふざけた台詞を吐く二人の表情からはとっくに険がとれていた。

まったく、おかしな双子だ。

「老婆心ながら。初ねえ終ねえには謝っておいた方がいい。あの人達は私みたいに甘くないし」

「ご忠告痛みいる」

そういえば下水道に送り込んだのは彼女だけではなかったな。もう一組の双子、鏡写しのニンジャメイドさん達がいた。

本当は物わかりのいい人達、だと良いのだが。ペンペンの言葉が冗談であることを祈るのみだ。
「あ、最後に一つだけいいですか？」
ペンペンの口調が急に変わる。
お前は刑事か探偵か。
「もしリンリンに何かあったら、きっと私がダン氏を殺してた。それだけ」
「……肝に銘じよう」
「では、リンリンをお願いします」
「どういう意味だ？」
「むろん性的な意味で」
「おい！」
「冗談。男女の関係的な意味で」
先のと大して変わっていない気がする。
「どうしてそういう話になるんだ……」
「そうだっ！　どこに議論の余地があるっ！」
意味を分かってか分からずか、火と見れば油を注ごうとするのが約一名居る。
よーく分かった。こいつは生まれついての騒動屋だ。
「リンリンは黙っててくれ、話がややこしくなる」
「サー、イエッサー」
リンリンの綺麗すぎる敬礼を完全に無視しつつ。
あたかも名探偵が事件の真相を説明するかのような不敵な表情でもって、ペンペンは立てた人差し指を振ってみせる。
「人質にするなら私を捕まえるチャンスがいくらでもあった。そこをわざわざリンリンを狙った時点で、ダン氏の好みはバレバレ」
まったく同じ顔でそんなことを言われても困る。
「いや、別に眼帯に含むところはないが」
「が、ががが眼帯ＯＫ？　マジで？」
妙なところに食いついてきた。
「眼帯とペンギンとフェティシズムの歴史と未来への展望について、ダン氏とは一度心ゆくまで語り合いたいもの」
ペンペンは隠されていない方の左目をらんらんと輝かせ、身を乗り出してくる。姉の方まで妙なスイッチが入ってしまったか。
「十五分と保たんだろう、それ」
いくらなんでも話題がニッチすぎる。
「君ら姉妹の容姿が愛らしいことは認める。だが、それで俺の態度が影響されている事実はない」
逸れかけた話題を本筋に引き戻そうとするが、
「ツンデレいただきましたっ！」
早速リンリンが反応する。
「だから黙っててくれと言ったろう！」
「イエッサー」
やはり彼女には無意味な発言や行動が多すぎる。騒動のさなかに見せた意味ありげな態度も、その場の勢いとノリであった可能性が高い。
ダンの感情の動きについてもすべて吊り橋効果で説明できる。
そもそも彼女に対するダンの態度は好意的とは言いがたかったし、外見的にも忌避されこそすれ好意を抱かれる要素などないはずだ。
これは由々しき事態と言えないだろうか。
「というわけなので、現在混乱のさなかにある我々にはクールダ

ウンの時間が必要だと考えられる。くれぐれも早まった行動に走らないでくれ」
自説を開陳し自制を促してはみたが、双子の表情を見る限りはさした感銘は与えられなかったようだ。
リンリンは肩をすくめ、同時に片方の眉を持ち上げてみせる。日本人にしてはジェスチャーの筋がいい。
「ダン氏はパーフェクトにいい男。帰り道で見つけた日からそう思ってたから、釣り針効果とか関係ないし」
「その通り。いつ誰の目から見ても十分イケメンと思われ。美人すぎてハンサムコンプレックスのナナちゃんが聞いたら激怒必至」
ペンペンまでこれだ。
ため息とともに肩が落ちるのが分かった。自分の容姿のことは自分が一番よく知っている。
二人のことをほんの少しでも見直しかけていたのに、他人のコンプレックスを褒め殺しとは悪趣味すぎる。
「ほれ見れ！　いい男じゃろ!?」
リンリンが開いたコンパクトを突きつけてくる。
鏡の中のそいつと、目が合った。
「うぉあああああっ!?」
即座に目を逸らしたが、心臓はなお早鐘を打ち続けている。
そして今更ながら、自分が悲鳴を上げていたのに気づく。
『そんなもの見せるなぁ！』
我ながらひどいものだ。こうして改めて見ても、鬼の血を引くと信じ込んでしまったのも無理はないと思える。
ダンと顔を合わせるたびにこんなものを見せられる他人にも同情を禁じ得ない。
と説明してしまうと冷静に判断しているようにも聞こえるだろうが、実際のダンの精神状態は冷静にはほど遠く。
『鏡だけは勘弁してくれぇ！』
フランス語で喚き立てているのにも気づいていない始末だった。
「どうどうどう、どうどうどう」
「よーしよしよし、よーしよしよし」
あとで聞いた話だが、この時ダンはたっぷり十五分ほども半狂乱になっていたそうだ。我ながら情けない限りだった。

ようやく我に返ったときには既に日が暮れていた。
「まったく面目ない。迷惑をかけた」
自分の顔を見てパニックになり赤っ恥をさらしたあげく、赤ん坊をあやすようにして同級生二人になだめられていたのであるから……これはもう落ち込むしかなかった。
そんなダンに同情したのか、傍若無人なリンリンさえもそれなりに腫れ物にでも触るような態度で、それがまたダンの心の傷をえぐる。
「あんなにマジ泣きされるとはおもわなんだ。正直スマンカッタ。これこの通り」
とリンリンには謝罪され、ペンペンには淡々と諭された。
「おちょくるつもりはなかった。でも、そんなに不細工だと思いこんでるのは多分本人だけと言ってみるテスト」
「なん、だと？」
「私達の言葉じゃ信じられないなら、全然知らない人はどうかな」

「ダン氏はここらの女生徒の憧れの的なのだよ。謎の夕焼け王子っつー触れ込みでさ。適当に話しかけたら喜ばれると思われ」
「……いや、それには及ばない」
自分の心と感覚が信頼に値しないであろう事は既に痛感している。だが宙ぶらりんでは思考を進めるのも困難だ。何らかの基準が必要というのなら、まずはこの双子の発言を全面的に信じるところから始めたいと思う。
これまでどこに引っ越しても馴染めたことがなかった。しばしば危険視され排斥されたのは、鬼の血を反映した恐ろしい姿ゆえ。彼にとってはそれが真実だった。
しかしダンがただの人間で、その姿も恐れるに値しないというのなら。他者に脅威を感じさせたのは、姿ではなく精神の醜さとそれに起因する行動だったのではないか。
ダンにとってそんな結論は断じて認められない。だからこそ鏡の中の彼は醜く恐ろしい姿でなくてはならなかったし、その神通力はダン自身にのみ劇的な効力を発揮している。彼の精神がいまだ、ありのままの自分を見ることを拒否しているゆえに。
「つまり俺はまだ壊れているのだな」
リンリンのおかげで自分の弱さ醜さに気づけた現在においても、ダンが自らにかけた呪いはまだ残っていたのだ。
「仮説として理解はできても、心の方にそれを受け入れるだけのキャパシティーがないのか」
自らを貶めるような結論を受け入れられるほどダンの度量は大きくない。
すなわち下衆な俗物なのだが、それを認めるわけにはいかない。
認められないのは人間としての器が小さいからであり……
思考が否定の無限ループに入る。投了。チェックメイト。完全に詰んだ。
論理的に俗物確定。言い訳の余地もない。ああ自己嫌悪。
「落ち込むなダン氏。そういうヘタレ俗物っぷりも可愛いよん」
地にくずおれ頭を抱えるダンの肩をぽんと叩き、リンリンが言う。
相変わらずの脳天気発言の真偽はともかく、慰めてくれようという気持ちだけは受け取っておくとする。
まあ、多少なりとも気分が軽くなったと言えないこともないかもしれない。
「俗物を恥じてる間はまだ俗物だって、さおりさんも言ってたぜい」
「さすがは完成された俗物。常人には言えない台詞を平然と言ってのける。そこに痺れる憧れる」
ペンペンはペンペンで淡々とそう言うが、本当に憧れているようにはあまり聞こえなかった。
まるで爺さんの好きだった禅問答だな。
そのさおりさんが何者かは知らないが……聖人君子かさもなくば、どうしようもないダメ人間に違いない。
いずれにせよ、あまり関わり合いにはなるべきではない人物だとダンの勘が警告している。名前を覚えておこう。
「まあ大丈夫っしょ。ダン氏はもう真実に気づいてるんだし」
「リハビリの時間はいくらでもあるから。これも乗りかかった泥船、私達も協力する」
そうだった。
三獣士討伐にかまけてすっかり忘れていたが、ダンは珠坂に転

地療養に来ていたのだった。
ダン自身の精神状態や目的意識はこの数時間で大きく変化しているが、結果オーライで本来の道筋に戻ってきたと言える。
ここまでの展開を計算して珠坂にダンを送り込んできたとすれば。あるいは偶然だったとしたらなおさらのこと……アリス先生恐るべし！
しかしその彼女をもってしても、ダンの病理がここまで根深いとは想像できなかったとみえる。
「残念ながらそんなに余裕はない」
今日の手応えからすると、転地療養の期限の三ヶ月の間にどうにかできる自信など到底ない。
しかし。
「心配ご無用」
ペンペンはそう言うと、一枚の紙切れを差し出した。
「ご覧の通り、ダン氏の珠坂永住についてはしのりんの許可済み。あと、紫城への転校手続きも」
「……手回しが良すぎるだろう」
見覚えのあるＤｒ．アリーセ・シュテンバースの直筆の手紙に、新川詩紀と赤字で署名されている。
良きに計らえ、と言わんばかりだが……本来であれば個人が裁定を下すような質のものではないし、これが国の正式な書類とはほど遠いことは想像がつく。
役所の頭越しにそんな真似ができる、すなわちこの国の裏側に大きな影響力を備える人物。三獣士の言うところの姫神本人かは分からないが、少なくとも近しい立場の人物だろう。どうしてそんなところと繋がっているのか。
前言撤回。やはりアリス先生恐るべし。
本人のあずかり知らぬところでダンの身の振り方が決定されているのは釈然としない。
しかし。アリス先生に対しては泣き寝入りこそが最も現実的な選択肢であることは、いくつもの苦い教訓とともに学習済みであったりする。
長いものには巻かれるとはよく言ったものだ。
「はーいリンリン思いついた。やっぱりゆっくり慣らすのが一番。まずはミラーハウスだね」
「名付けて四六のガマ作戦」
「……俺に発狂しろとでもいうのか」
さっきまでの醜態を覚えていないのかこいつらは。そういうのはリハビリではなくショック療法という。
「時間はあるんだし、思いついた手段はどんどん試すのが吉」
「また落ち込んだらちゃんと慰めてあげるからねー」
「哀れみのマッチポンプはノーサンキューだっ！」
どこまで本気なのか。ダンをいじって反応を面白がっているだけではあるまいな。
「これは哀れみにあらず、無償の愛（アガペー）っ！」
「愛だよ、愛」
そのあげくに二人の口から出てきたのは、とことん胡散臭い単語だった。
「愛、ねえ」
この二人。ダンのようなまがい物とは違う本当のバケモノのくせに、どうにもゆるい。ゆるすぎる。
脳天気と淡々の好一対。打てば響くような軽口の応酬。中身は

無意味に等しい。
　これは間違いなくおもちゃにされていると確信するが、しかし不思議と落ち込むことはない。ここまで軽く扱われるといっそ清々しいとさえ思える。
　目の前で醜悪な部分を徹底的にさらけ出してなお、友人として扱ってもらえている、それが分かるからだろうか。こいつらの前では何の気負いもなくいられる。その何と心地よいことか。
　そう、心地よいのだ。
　気づいた時には、自然に笑いがこぼれていた。
「はっはっは」
「おお、ウケた」
「ウケてるね」
「はははははははははははははははは！」
「ちょ、ダン氏マジ大丈夫なん？」
「これはいよいよ壊れたかな」
　涙が出るほど笑ったのなど、一体どれほどぶりだろう。笑うたびにぶつけた背中が痛み、さらに涙が出てくる。
　それでも笑いがとまらない
「はははははははははははははははははははははははは」
「「おーいダン氏。帰ってこーい」」
　喉がかれるまで笑って笑って笑い、笑い発作が収まった頃には完全に真っ暗になっていた。
　春とはいえ夜の公園はまだ肌寒い。名残惜しくはあるが、いつまでも双子の軽口に付き合ってはいられない。
　近いうちの再会を約束して暇乞いをしようとした時、
「ダン氏が帰るのはそっちじゃない」
などとペンペンが言い出した。
　彼女の言によれば、ダンの永住用の住み処も既に準備されているという。永住なら確かにいつまでもホテル住まいというわけにも行かない。またもや実に手回しの良いことだ。
「なーる。それで開かずの零号室を掃除してたんだ。リンリン納得した」
　聞き捨てならない単語が混ざっていたような。
「では引っ越しは週末にでもやろう。住所と連絡先を教えてくれないか」
　そういえばリンリンの携帯電話を返しておかねばならなかったな。
「今から直接来るべき。荷物は初ねえ終ねえが指揮して寮の方に運んでくれてるはずだし」
　それはさらに聞き捨てならん。
「文明国家なら異国人相手にも人権の尊重をお願いしたい！　具体的には財産権とプライバシー権！」
「それに関しては残念なお知らせが」
　全然残念そうに見えない無表情でペンペンは続ける。ダンの意志など関係ない、と言わんばかりだ。
「外国籍かつ保護観察中のダン氏の公民権は普通でも制限されるし、こちらでの身柄は斗流預かりだから政府の管理からは外れてる。実際の取り扱いに関しては処分も含めて私達に一任されていたり。そこらへん、斗流宗家のしのりんも身元引受人の揺子さんも了承済み」
「つまりダン氏の生殺与奪はリンリン達のご機嫌次第って事だね、おねいちゃん」

「居ないはずの人間が一人ぐらい消えても騒ぎにはならない。向こうの家族にはきっと行方不明と連絡が」
『なんだそれはーっ！』
いくらなんでも恣意的すぎる。横暴だ。どこの独裁軍事国家だ。
これが本当なら、ダンは少女の姿のバケモノに勘違いで喧嘩を吹っかけ、気まぐれの厚意で命を拾ったはいいが、自由を失ってペット同然の立場にされてしまった事になる。道化もいいところではないか。さきほどの犬扱いも真実になりかねない。
『あ、悪趣味な冗談、だよな？』
笑えなさすぎる。
「鬼憑きに人間用の法律が適用されるはずないじゃん。残念だったね～」
と、リンリンはにやにや笑いを浮かべて宣った。
ことこの状況に至っては、自分が人間で良かったと素直に喜ぶ気になれない。
「調子に乗りすぎると黒男さんに粛清される。リンリンは十分注意した方がいい」
「はーい」
つまりそのクロオさんとやらだけは、いざという時にダンの味方になってくれる可能性があるわけだ。早めに会っておくべきだろう。
「そーゆーわけで、ダン氏はリンリン達とせいぜい仲良くするよーに」
「鬼憑きと普通に付き合ってくれる人間は貴重。独り身のいい男はもっと貴重」
「美人なメイドは間に合ってるから、ここはかっこいい執事が欲しいとこだよね」
こいつらの偽悪的な台詞や軽薄さは、新しい友人に対する照れ隠し。そういうことはないだろうか。
きっとそうだ。そうに違いない。
今や捕らえられた珍獣的立場のダンとしては、そうとでも思わねばやりきれなかった。
『くそっ。そんなことのために人を国にも帰れなくしやがって』
ダンにとっては生まれた場所という意味しかない場所でも。決して気分の良いものではない。
「故郷は遠くにありて思うもの。ハンサムは近くにおいて愛でるもの」
リンリン・ペンペンは完璧なハーモニーでもってそう告げると、満足げに右の拳と拳を打ち合わせ、満足げに笑い合う。さすが双子と言うべきか。
『うまいこと言った、って顔するな！』
鬼だ。本物の鬼どもがここにいる。
他人の人生をもてあそんで軽口のネタにするような連中を迂闊にも友人認定してしまうとは。早まったか。
「よーしおいでおいで」
「ちっちっちっ」
二人並び、掌を上に向けて差し出してくる。やはり、完全に犬扱いだ。
だが、双子のキメラ達の監視下に置かれる生活が、それほど悪いものになるとは思えなかった。
こいつらと会って、心底楽しいという感覚を始めて知った気がする。

立場などどうでもいい。楽しく生きていければそれでいい、と感じるのは近代国家の市民としては堕落なのかもしれないが、生物としては長足の進歩だろう。

多分に強制的ではあるが、居場所と立場を得るというのもなかなか悪くないものだ。今はメイド姿の同級生を主人にもつというのはいささか奇妙な気分だが。

「ふう」

光量の少ない街灯の下、少しだけうつむいて手を差し伸べ続ける二人はダンに強引な救いをもたらそうとしている。

ここで断ったら彼女達は怒るだろうか、それとも……

別に悩むことはない。心は決まった。

「これからよろしく頼むよ、お嬢様方」

ダンの方から握手を求めると、二人の表情は花開くように明るくなり。差し出した両手をそれぞれ握りかえされた。

「早速お手キター！」

「捕獲完了」

彼女達が柄にもなく緊張していたのだと、この時ようやく知った。

双子の屈託のない笑顔は、鬼が憑いているなどと信じられないほど愛らしく。鬼の血と美醜は関係ないと実感できた今ならばこそ、ダンが妄執から完全に解放される日も遠くはないだろうと思えた。

「よーし、ペンペン刑事。署まで連行するぞ」

「はっ。絶対に逃がしません」

捕らえられた宇宙人よろしく。そのまま二人に手を引かれつつ、半ば引きずられるように、ダンは公園を後にする。

一度だけ振り返り、過去の自分を置き去りにして。三人で歩く初めての家路。

所属意識を得て生まれ変わったダン・ルイ・マティアス・ロシニョールと、双子の主に幸あらんことを。

きそーほんのお？
帰り道はGPSで調べますよスマホの
？
Lagado

大事なもの

春屋アロヅ

放課後のざわついた教室の中、雅（みやび）は教科書をかばんに入れて美紀の方を振り返った。隣の席の男子としゃべっている美紀は雅に背を向けていて、こちらの視線には気付いていないらしい。

二人の話の切れ目を待って少しの間そうやって見ていると、別の女子が雅の視線を遮るように通り過ぎた。一拍おいて、カッターン、と乾いた音が教室に響いた。一瞬、教室中の視線が彼女に集まった。

「あ、ごめん。引っかけちゃった」

「いーよいーよ。あ、ありがと」

美紀の机のそばを通る時に、机に立てかけてあった松葉杖を倒してしまったのだ。拾い上げた彼女に礼を言って杖を受け取った美紀は、そのついでに雅の視線に気付いたらしい。目が合った。

雅が席を立って美紀に近づくと、美紀は隣の男子に何事回って、雅を向けるように立ち上がった。その左足には黒いサポーターが巻かれている。バンドでの演奏中にステージから転落して、捻挫したのだ。

「あ、もう出るんだ。一緒に帰ろ？」

雅が美紀のかばんを取ると、綾乃がパタパタと寄ってきた。タイミングがいいのは、雅と同じように二人の様子をうかがっていたのかもしれない。よく一緒に帰るもう一人を探すと、教室の隅の方で輪になってしゃべっている中にいた。

「佳奈ー？」

「――あ、今日はあたし妙子たちと遊んで帰るから。また明日ねー」

「おー」

三人で佳奈に手を振って教室を出た。雅たち三人は放課後まで一緒に過ごす友人はあまり多くないが、佳奈は他のクラスも含めて知り合いが多いから、こういうパターンはよくあることだ。美紀と綾乃がしゃべり、雅はそれに時々口を挟みながら駅まで向かう。

「捻挫だけでも大変そうだけど、それで済んでよかったね。ステージって結構高いんでしょ？」

「あの店はたまたま他所より高いトコだったんだよな。大体……そうだな、オレの胸くらいかな」

「ミキちゃんの胸くらい……高いね。講堂のステージくらいかな」

そう言いながら、美紀の胸に視線を向ける綾乃。その視線がほぼ水平なのは、百七十センチの美紀の胸の高さだと、百五十センチ前後の綾乃の目の高さとあまり変わらないからだ。

「いつものライブハウスなら教壇一段分くらいだから、大したことなかったのにな」

「まあ、でもいつもよりでかいトコでやって、人多いしノリいいしでこっちもテンション上がってたからなー」

「骨折らなかったのと楽器が無事だったのが不幸中の幸いだったな」

「ホントな。弾いてる最中でよかった」

雅の言うのに美紀が頷くと、綾乃が隣で首を傾げた。

「弾いてる途中の方がいいの？　手が止まってる方がいいんじゃなくて？」

「手が止まってる時だと楽器よりも体かばっちゃうじゃん？　反射的に。床に手をついたりとか。そしたら楽器を床とかにぶつける可能性が高くなるだろ？　けど演奏中は――」
　美紀は足を止めて、ベースを弾く時のポーズをして見せた。さすがに何年も熱心に演奏してきているだけあって、持っていないベースが見えるほどきれいな構え方だ。
「こんな感じだからさ。左手はネック握ってるし、右手も思わずベースを抱えるようにこう持っちゃったから、楽器は無事だったんだ」
「でも、それでミキちゃん怪我しちゃったんだったら意味ないよ」
　綾乃は不意に真顔になって、叱るように言った。
「もっと大怪我してたかもしれないんだよ？　ちゃんと体、大事にして？」
　美紀は驚いて、思わず「はい」と折り目正しく答えた。

　綾乃に見送られて、美紀と雅は美紀の家の最寄り駅で降りた。雅自身の最寄り駅はもう二駅先だが、杖なしで歩けるようになるまではかばんを預かって美紀の家まで送り迎えをすることにしていた。
　今朝のように迎えに行くことはほとんどなかったが、学校帰りに駅から二人で並んで歩くことには特別な感じがしない。以前は中学校から自転車を連ねて美紀の家によく遊びに行っていたし、高校に上がってからは雅に家に美紀が週に一度は来るからだ。
「しかし、言われてしまったな」
「ああ。悪りーけど、教科書頼むわ。手伝ってくれりゃたぶんそんなに時間かかんないだろうし」
「……そっちじゃなくて」
　そっちというのは、駅の階段を上る時に、危なっかしい美紀をフォローするために雅が綾乃にかばんを預けたら一言『ミキちゃん、かばん軽いね』と言われてしまったことだ。宿題が出ていたのを忘れて、問題が載っている教科書や問題集まで置いてきてしまったものだから、雅に見せてくれと頼んだのだ。
「ああ、歩いてる時のアレか」
「そっちだ」
「まあ、それは綾乃だしなぁ……」
　怪我なんてほとんどしてないのに心配性だよな、とあっさり言う。綾乃の心配の種はライブで調子に乗ったということではなく、それ以前から美紀が怪我を顧みない行動に出ていたことから来るものだ。
「実際、弾いてる途中でテンション上がってる時の方が怪我しにくいし、エレベが暴れたら自分の体までバランス崩れるから、ちゃんと楽器持って落ちるのが一番怪我が少ない落ち方なんだけどな……」
「そこまで説明しないといけなかったな」
　雅はこのことを聞いているから何気なしに楽器が無事で、などと言ったが、雅自身も最初はそんな時くらい楽器を捨てろと思ったのだ。綾乃がそれを考えないはずはない。
「それでも、綾乃の言うことは正しい。お前は体を大事にしなさ過ぎだ」
「そんなこたねーよ」
「最近は目立たなくなっただけだろう。スカートをはくのはいやがって怪我をいやがらないのは逆にしておけ」

「いや、それはどっちもやだよ」
ジト目でこちらを伺う美紀を見て、雅はそう言えばと思い出した。美紀がウェイトレスのようなエプロンドレスでライブに出たことがあった。
「そういえば、六月のライブの時の衣装、お前の部屋にあったんじゃなかったか？」
「……着ねーよ？」
「そうか。明日は宿題を忘れてその足で立つか」
「お前鬼か！」

猫と二人で

Fukapon

間もなく日が変わろうという時間、彼女は満員とはならなかったバスを降りた。

「あーあ、結構降ってるなぁ」

彼女、笠松時子（ときこ）は天を仰ぎながら独り言をこぼした。

駅までは百数十メーター、このバスが駅前ロータリーにさえ入ってくれればと愚痴っても仕方がない。このあとの今日の予定は帰ってお風呂に入るだけ。多少濡れることを気にするほどでもない。

そう思うと何となく雨も心地よく思えて、年甲斐もなく小さくスキップなどしたからだろうか。いつもだったら見向きもしない公園が時子の視界に入った。

（こんな時間でも意外と人がいるのね）

視線の先には水色の傘。街灯に照らされ明るい色が映える。傘の持ち主は屈んでいるのだろうか。傘の位置が低い。

だからどうと言うことはない。時子は視界から外れるまでの、つかの間の観察を終え、いつも通りに横断歩道の信号を待つ。青信号となり横断歩道を渡り、駅に入ると自動改札を通り抜けた。

翌日もまた、時子は真夜中を目の前にバスを降りた。

逆方向のバスに乗ったのは十五時間以上も前だ。この時間に帰ることを望んでいるわけではないが、会社勤めとはこんなものだと諦めている。彼女が生まれた頃、三十年弱も前の昔なら、彼女のような存在はＯＬと呼ばれ、制服を脱いでアフターファイブなんてこともあったのかも知れないが。

夜だろうと灯りで照らされた歩道を少し進むと、時子は意図して足を止めた。

「あ、いる」

公園の中に人影を認め、彼女は小さく声にした。

ここ東京では二十四時間三百六十五日、どこにだって人がいる。東京暮らしの長い彼女は十分承知している。だから目の前の出来事を特別なことだとは思っていない。ただ、彼女にとって、いつもと違う発見をしただけだ。

いつもとのちょっとした違い。ちょっとだからこそ、彼女は何となく踏み出せたのだろう。

スッと公園に入ると、はて、どうしたものか。

奥の方で今日も身を屈めている人、時子の興味の対象はその人だ。しかし、興味をどうぶつければよいのだろうか。

こんな時間に突然話しかけるか。仮に逆の立場だとしたら、時子は怪しい人から逃げると断言できる。あの人の邪魔をするのは本意でない。

黙って接近して黙って眺めるか。仮に逆の立場だとしたら、やはり怪しい人から逃げると断言できる。あの人の邪魔をすることは間違いない。

一体全体どうしたものかと思案している彼女の姿はすでに、公園の真ん中で突っ立っている怪しい女性だ。しかし当人は気付くはずもなく、しばらく思索に耽った。

まだまだ結論は出なかったが、事態を打開したのはキュートな声だった。

「みゃーあ」

よく聞くと何匹かいるらしい。鳴き声の方に目を凝らすと、四、五匹の猫がいるようだ。

時子は愛らしい声、愛くるしい姿に誘われるが如く猫たちの方へと一歩二歩。

彼女の足音に気付いたのだろう、猫の前で屈んでいた人が顔を上げ振り返った。

お互いがお互いの顔を見るや、交わしたのは挨拶ではない。

「「あっ」」

見覚えのある顔に、感嘆の声を上げた。

「笠松さん、ですよね？」

「は、はい。えっと、あー」

屈んだままの女性がすんなりと彼女の名前を呼んだのに対し、時子は女性の名前が思い出せずばつが悪そうに苦笑い。

女性はゆっくりと立ち上がると、青白い街灯に照らされた笑顔を時子に向けた。

「桜田久乃（ひさの）です。笠松さんの隣、第三グループ所属です」

「ごめんなさい、桜田さん。お顔はよく拝見しているのに……」

「お気になさらないでください」

久乃は確かに笑顔のままで言うのだが、時子にはどうも、反応しがたい雰囲気が感じられた。しかし僅かな緊張感はあっと言う間に弛緩する。

「みゃう」

「にゃー」

久乃の足下には依然として数匹の、時子が数えてみると六匹もの猫たちがいた。あるものはお行儀よく座り、あるものは久乃の靴の上でじゃれている。

猫たちの声を聞いて久乃は再び屈んだ。

「こちらは笠松時子さん、久乃と同じ会社で働いている人だよ」

バスガイドのようにちょんと掌で時子を示した久乃は、猫たちに時子を紹介している。

時子は予想だにしなかった行動に少し驚きながらも、目の前の違和感に内心笑ってしまった。

（自分のこと、久乃って言うの？　その格好で、ねえ）

タイトスカートのスーツを着込んだ久乃の見た目は、その長身と相まってキリッとした大人の女性だ。一人称が名前なのは似つかわしくない。

尤も、猫とじゃれ合っている姿にはぴったりであるが。「みゃ」と短く鳴いた虎猫が久乃の肩に飛び乗る様を見て、時子は思わず目を細めた。

肩に加えて膝にまで猫を乗せた久乃は、再び時子と目を合わせた。

「あの、終電、大丈夫ですか」

「あっ」

時子は左腕の袖を上げて時計を見ると、二十四時をとうに回って終電の到着時刻が迫っていた。

「お休みなさい」

「みゃー」

「にゃああ」

袖を直して視線を戻すと、久乃と周りの猫たちからお別れのご挨拶。

時子も小腰を屈めて、思いっきり開いた手を振った。

「お休みなさい。また明日」

Re:debut

なぎ

新幹線のドアが開くときんと冷えた空気が肌に触れた。慣れ親しんだ空気のはずなのに肌を切るように感じてしまうのは東京の空気になれすぎてしまったのかもしれない。押し返されるような風に力みながら車両からおりると静寂と冷たさに包まれた。

「わたし、ユニットをやめることにしたから」

ふと、真由美がユニットをやめるという話を持ち出したときのことを思い出していた。六年活動を続けたユニットを真由美が脱退して落ち着いて考え直したいといったとき、わたし達の中で不思議と反対意見は出なかった。それはこれまでの活動で限界のようなものを感じていたのかもしれないし、やりきったという達成感からなのかもしれなかった。

実際のところ活動は行き詰まっていたように思う。デビュー前からデビュー後の一年くらいは全力で走った。そしてレッスンに営業にそして食べるためのアルバイトに。少しずつファンが増えていくことに喜びもあった。でも活動は段々と頭打ちになっていた。

プロモーションするにしてもお金がかかり、その効果が売り上げ増を超えることができなければプロモーションは続けられない。リリースは続いてもプロモーションができなければ売り上げもファンも縮小均衡していく。まあ、もちろんそこにファンがいて確かな手応えがあったからこそ続けられたのだとは思う。

そんなわけで、真由美が脱退すると言う話は結局はユニットの解散という話に収束した。元々ばらばらの地方から集まったわたし達三人だったけど、解散後の活動もそれぞれなった。

真由美はソロでタレントとして活動し、未冬は引退して東京で美容関連で働くことを選んだ。私は、地元に帰ることに決めていた。それは上京するときに決めた父との約束でもあったし、自分にとっても東京という土地が一生過ごす土地ではないように感じていた。六年ぶりに生活することになった故郷は離れる前と一見変わらないような風景なのに自分とは違う時間の流れにあるようなそんな気持ちを持っていた。

「あのー、お願いがあるんだけどさ」

勤務中に職場の上司であるところの課長から声をかけられたことを思い出していた。会社員として働き出してから朝晩の通勤の時間帯というのが数少ない個人的な時間だと感じるようになった。東京にいるときは移動は電車で、スマホや本などに没入することでえていたパーソナルスペースが地方では車に乗ることで、簡単に手に入った。いつものＦＭラジオから流れるパーソナリティの声や音楽とロードノイズの単調なパターンが集中を与えてくれた。

課長からのお願いは簡潔に言うと地元で開かれるお祭りのステージに立って欲しいということだった。どういうわけか取引先の偉い人に私の過去を知っている方がいたらしく、「あんたの所に元アイドルが働いているんだろ？」などと営業担当者が言われたらしい。「断れないんですか」ときいてみたものの「大口の取引

先だからなー」と浮かない返事だった。
　課長はいかにも中間管理職という人物で課長の上司達からの無理なお願いと部下達からの苦情を調整するのが仕事のようだった。同僚達はあの人は調整ばかりで仕事をしていないなどと言っているが、急に入社することになった元アイドルであるところの私を受け入れられるように社内にお願いして回ったのが課長だと知っているし、結局こういった人がいないと社会は回っていかないということで、私は課長のことを信頼していた。
　そんな、課長からのお願いであるので断る訳にはいかないのかななどと考えていた。

「やってみたらいいんじゃないの」
　真由美がアプリで送ってきたメッセージ時は意外なものだった。私達は解散して別々の生活をすることになってからも時々メッセージアプリでのやりとりを続けていた。仕事の愚痴や相談、恋愛や人間関係などいろいろなことをやりとりしていた。六年間を共に過ごしてきたからお互いを理解して話し合うことができるし、今は距離も利害関係も離れているから遠慮なく相談することができていた。
「意外だね」
　自分の言葉を代弁するかのような未冬のメッセージ。
「そうかな？」
　真由美はそう書いてから少し時間を空けて続けた。
「人間変われるような機会はそんなにないから……それが与えられるのなら、やってみてもいいじゃない」
　東京で芸能活動を続ける真由美らしい言葉だと私は感じた。
「まあ、東京でアイドルしてたのに……なんて言われないようにして欲しいけど」
　なんて最後は釘をさされたけど。
「綾乃が自分で考えて出した結論ならそうすればいい」
　よく父に言われた言葉だ。上京を決めたときも、引退して戻ってくること決めたときも、この言葉を言われた。今回またステージに上がると決めたときもそうだった。私は父にこの言葉を言われるとき、十分に考えたのかと自分で再確認するようにしている。
　今回ステージに上がるのはいろいろなしがらみもあったけど、自分が好きだったこと、ずっと頑張ってきたことを再確認したいという思いがあった。離れてしまったことに再び触れることで何かしらの答えがえられそうな気がしたからだ。
　私はユニットの一員ではなくただの個人としてステージに上がる。プロではなくアマチュアにはなったけど舞台に立つという点では平等だ。準備は十分とは言えないけど観客に何か伝えられればよい。そんな風に思いながら自分の出番を待っていた。

明日、ただいまって言えま

川鵜鶏肋

ラスト一週の仕事が予想外にきつくて慌てました。お話も難産でしたが、結果的にはお気に入りの一作となりました。タイトルはお題そのままですが、書き終わった瞬間にスッと腑に落ちて決定。今回のお題は書きやすかった気がしますね。

春屋アロヅ

一年ぶりのはずなのに前回のお話から半日しか経っていません。

http://third.system.cx/

Lagado

伝書鳩はデンショバトという名の生物種が存在する訳ではなく主にカワラバトを訓練したものを言いそのカワラバトはドバトと同じ種を示しそのドバトの語源は土鳩或いは堂鳩とされまた平和を顕す白鳩の種も此のドバト即ちカワラバトではあるがカワラバトの白色の羽毛は劣性遺伝による性質ゆえに元来個体数は少ないとされ……

http://third.system.cx/

Fukapon

対策は打った。来年は悪くならなければよくなる（当然）

http://www.fukapon.com/

な ぎ

急に熊本のイベントに行くことになったのでこのコメントは熊本のホテルで書いております。しかも寝落ちしてしまって完全に締め切りを過ぎてしまっていて編集担当のＦ氏にはご迷惑をおかけしました。最近、某声優アイドルにはまっているのでアイドルの話を書いてみたかったのですがいつも通りの不完全な感じで申し訳ありません。来年からはキャリアチェンジされる方もいるようで、合同誌の明日はどっちだ !?

レイアウト

「ただいま」って言えてよかったなって。

http://www.projectkaigo.org/

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 13
家路

2014年11月 9 日　初 版 発 行

発行所　まにふいくみやはか
http://www.projectkaigo.org/

印刷／製本　project KAIGO

Copyright © 2014 川鵜鶏肋，春屋アロヅ，Lagado，Fukapon，なぎ，まにふいくみやはか
この本は Creative Commons Attribution 4.0 International License に従い頒布されます。
詳細は http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/ をご覧ください。

mCMX 編集部ではあなたの作品をお待ちしております。
作品がいただけないと休刊です。

頭痛

がテーマの作品を募集中。ジャンルは何でも。
締切は発行当日００時（＋２時間ぐらい）。
未完成でも載せたらいいんじゃないって感じで。

Next Issue in May 2015
http://www.projectkaigo.org/

また１回休みになったらごめん……